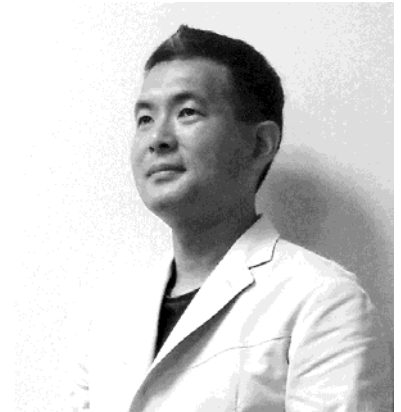


音楽の世界

目次

| | | | |
|---------------|--|--------|----|
| 論壇 | ハプスブルク史研究の今日的意義 | 小宮 正安 | 2 |
| 特集 | 西洋近代史と現代の接点について | | |
| | 日本史とその背後にある西洋近代史について | 中島 洋一 | 4 |
| | 多国籍社会と自己について ~在る作曲家の日常から~ | 橘川 琢 | 10 |
| 海外レポート | スペイン、ベルリン、ウィーンを旅して(後編) | 深沢 亮子 | 14 |
| 特別寄稿 | おどろきのスコットランド独立未遂 | 助川 敏弥 | 21 |
| リレー連載 | 未来の音楽人へ(17) | 上仲 典子 | 22 |
| 連載 | | | |
| | 歌の道・我が音楽人生(8) | 久住 祐実男 | 26 |
| | 音・雑記一ひなの里通信一(71) | 狭間 壮 | 28 |
| | 名曲喫茶の片隅から(52) | 宮本 英世 | 30 |
| | 音盤奇譚(57) | 板倉 重雄 | 32 |
| | 人・アート・思考塾(6) | 小西 徹郎 | 34 |
| | 電子楽器レポート・連載-18【中国は電子オルガン界の中興の祖となり得るか】 —中国高等教育機関に見る新たなうねり— | 阿方 俊 | 36 |
| | コンサート・プログラム『様々な音の風景 XI』 | | 38 |
| | CMDJ 会と会員の情報 | | 48 |

西洋文化史：小宮 正安



「ハプスブルク帝国の文化史をメインに研究しています。」…こう自己紹介すると、多くの場合、次のような答えが返ってくる。「それはよいご趣味の研究ですこと。」あるいはもう少し否定的なニュアンスが伴うと、こうなるかもしれない。「そんな大昔のことを研究してどうなるんですか？」

いずれにせよ両方の反応とも、同じところに根差しているのだろう。つまり、ハプスブルク帝国は過ぎ去りし過去の存在ということ。だからこそ、そこにノスタルジックなイメージを投影して喜ぶか、あるいは時代遅れの事柄として切って捨てるか、という一見両極端の結果が生まれてくることとなる。

もちろん、こうした見解も故なきことではない。卑近な例を出すならば、ウィーンを観光していてそこかしこで目にする「ハプスブルク・イメージ」の洪水。土産屋で売っているハプスブルク家の紋章をあしらったチョコレート、あるいはマリア＝テレジアの肖像入りキーホルダー、エリーザベトの人形といったものを見てみると、そこには過ぎ去りし帝国の輝かしいイメージを用いて、徹底的に商売をしようというあざとさが目につく。

いや、一つ土産物の世界にとどまらず、研究の世界においても、昔はあであったこうだったといった具合に、過去の事象を掘り返す事例が少なからず見受けられる。もちろんそうした作業自体、特に歴史関係では重要であるし、それを抜きにしてこの分野が成り立たつはずもない。だがそこに新たな視座を提示したり、さらにそれを現在に照射したりしようという姿勢が欠けているならば、単なる訓誥学で終わる危険性も大いにあるだろう。

では、今あえてハプスブルク研究をおこなう意味はどこにあるのか？例えば、ウクライナ情勢を考えてみよう。ヨーロッパ情勢にきわめて疎い日本のメディアでさえ、折に触れてこの問題を取り上げていることを見るにつけ、この問題がどこか遠い場所で起きている出来事などではなく、日本の政治経済にも大きな影響を与える事件と捉えられていることがよく分かる。そしてこのウクライナこそは、あるいはウクライナ情勢が複雑化している原因の一端こそは、ハプスブルク帝国の存在抜きに考えられないのだ。

かつてハプスブルク帝国の領土は、ウクライナにまで及んでいた。いや、一つウクライナに限らない。帝国の領域は時代によって絶え間なく変化を遂げ続けたが、バルカン半島から東欧諸地域、北イタリア、さらにはオランダやスペインまでもがハプスブルク家に傘下に置かれていたことは事実である。しかもドイツも長年にわ

たり、ハプスブルク家の影響下にあった。となると、ハプスブルク家のお膝元であったオーストリア、ひいてはその都ウィーンとは、帝国のそこかしこからやって来た多民族の集う地であり、彼らが織り成す多彩な文化が積み重なり合う国際的な空間だった。

現在でこそ、国際化というキーワードがしきりに取り沙汰されているが、このように考えるとハプスブルク帝国はそれを既に数百年前から実践していたことになる。もちろん、多民族が一堂に集うという状況に、単なる綺麗ごとを見てとるだけでは済まされない。そこには、現在のウクライナ情勢にも典型的に現れているように、言語や文化を異にする者同士の対立がひっきりなしに起こっていた。またハプスブルク家という強力な貴族が、彼らを上から支配しているという旧態依然とした権力構図も存在した。

ただし好むと好まざるとにかかわらず、ハプスブルク帝国が巨大な領土を有していたことはたしかだった。またそのような状況の中で、いたずらに民族対立を煽るだけでなく、逆に民族融和を図ることで、帝国の維持が図られていったということも。「戦いは他に任せておけ、幸運なるハプスブルク家よ、結婚せよ」というハプスブルク家のお家芸とも言える婚姻政策には、武力のみを以てしては解決不可能な帝国を治める一族の政治哲学が表れているとあってよい。(しかも、ハプスブルク一族は武力にも優れていたにもかかわらず、こうしたことが言われた点が非常に興味深いのだ。)

そのハプスブルク家も、今からちょうど100年前、緊迫するバルカン情勢の中で勃発したサラエヴォ事件を契機に第一次世界大戦へ突進。結局は敗戦へ追い込まれた挙句、帝国自体も崩壊する。帝国が有していた地域からは、民族自決を掲げて様々な国々が独立を遂げた。だがそれがかえって各国の対立を招き、第二次世界大戦や東西冷戦のようにヨーロッパを再び混乱と緊張に陥れる状況を招いてしまった。

こうした中、多民族が緩やかな共同体を形成するヨーロッパのあり方が、再び切迫した問題として取り上げられるようになったことは言うまでもない。そしてそれを実践していた古典的モデルといえば、他ならぬハプスブルク帝国だった。ハプスブルク帝国の中心地であったオーストリアが、第二次世界大戦後中立国となる中で、EUの誕生にあたっての思想的バックボーンとなったり、首都であるウィーンに国際連合の事務局が設置されたりしたのもけっして偶然ではない。

「ハプスブルク帝国」というと、古色蒼然としたイメージがつきまとうのは避けようのないところかもしれない。だがそこには、現代社会にもきわめて大きな影響を与えている、あるいは与えうる要素が満ちている。それはちょうど「クラシック音楽」の中に、今を生きる私たちを虜にする力が溢れているのと、実に同じことではないのだろうか？

小宮正安（こみや まさやす：ヨーロッパ文化史研究家・横浜国立大学准教授）

日本史とその背後にある西洋近代史について

作曲 中島 洋一

〈まえがき〉

日本音楽舞踊会議では、『近代西洋史と音楽家たち』という文化シンポジウムを継続中である。ここで称する近代という時代区分は、フランス革命が勃発した18世紀末から第一次世界大戦に突入した1914年までをさす。この時代は西洋音楽史上ではロマン主義を中心とした時代であり、今日のクラシック・コンサートにおいて演奏される頻度が高い作品を生み出した作曲家を多く輩出した時代でもある。シンポジウムの目的の一つは、音楽家、音楽愛好者の人たちに、それらの音楽作品を生み出した時代の歴史的、文化的背景を知ること、その時代に活躍した音楽家と生み出された作品についてより興味を抱き、理解を深めてもらうことであるが、もう一つは近い過去を洞察する作業を通して、今を生きる我々にとって、ヒントとなるものを探ることにある。

近世の時代まで、西洋と東洋（日本、中国など）は貿易を通しての交流があったとはいえ、概ねお互いに独自の歴史を刻んで来た。しかし、この時代に入ると西洋と東洋は交差し、お互いに強く関わりあうようになる。

我々が企画している文化シンポジウムでは、今回はハプスブルク帝国を中心とした19世紀後半から帝国が終焉する20世紀初頭までを採る上げる予定だが、この時代になると日本も世界史に登場してくる。

なお、今回の文化シンポジウムにおいて、メインパネラーをお願いしている小宮正安氏に今回は論壇の執筆を依頼したが、その論壇の文から、P.21に掲載した助川敏弥氏の「おどろきのスコットランド独立未遂」まで、特集に関連する文として範囲を広げて読んでいただけると、より興味が増すのではないかと考える。

なお、今回の私は、西洋近代と日本史とのつながりについて書かせてもらうこととした。

鉄砲の伝来

日本人は歴史時代のはじめから中国、朝鮮とは深い関係をもち、特に中国からは文学、美術、音楽、医学から統治機構に至るまで広く影響を受けて来たが、西洋人、西洋文化と交わるようになったのは戦国時代の最中の16世紀以降からであろう。

1543年種子島西之浦湾に漂着した中国船に同乗していたポルトガル人から、島主の種子島恵時・時堯親子は1挺1000両という破格の価格で鉄砲を2挺購入し、刀鍛冶に命じて複製を製作させた。それが、種子島銃である。やがて、堺、国友などの地域を中心に鉄砲鍛冶の技術が伝わり発展し、品質の高い製品を量産することが可能となった。

織田信長をはじめ、戦国に生きる大名たちが争って銃を買い求めたため、短期間で日本は世界最大の銃保有国となった。それは戦後、我が国の産業が急速な技術革

新により、テレビ、自動車などの産業部門において世界一の輸出国となった事実と重ね合わせて見ると興味深い。

鉄砲が伝来して間もなくの1549年にはイエズス会のフランシスコ・ザビエルにより布教が始まる。キリスト教の伝来である。そして、ポルトガル、スペインとの南蛮貿易が盛んになって行く。しかし、南蛮人（ポルトガル人、スペイン人）との交流は、日本の国情、国際状況の変化などもあり、長くは続かなかった。

戦国時代の終焉と平和な時代の到来

周知のように1600年の関ヶ原の戦い、1614～1615年の大坂冬の陣、夏の陣を戦

いに勝利した徳川家の政権が確立する。その後、1638年に九州地方で凄惨な結果を招いた島原の乱が起こるが、島原の乱鎮圧後は、大規模な一揆や戦（いくさ）は姿を消し、我が国は世界史上でも珍しい、長い平和の時代に入る。そして、あれほど盛んだった銃生産も制限されて行く。銃規制政策の裏には、もちろん殺傷力のある武器の使用を制限することで反乱を未然に防ごうという体制側の意図があったが、それだけでなく、支配者側、被支配者側ともに、大量殺戮につながる銃を武器として乱用することはだけは避けたいという共通の思いがあったからではなかろうか。島原の乱

以降、百姓一揆が起こった際、諸藩は幕府の許可なしに、農民達に向かって銃で水平射撃を行うことが禁じられる。また民衆に対しても、人を殺すための武器としてではなく、猟を行うための銃の使用は許可している。

また、島原の乱以降、幕府は宗門改（しゅうもんあらため）役を設置し、キリスト教徒を厳しく取り締まる目的で各藩に宗門改帳の作成を命じた。それはやがて宗門人別改帳として引き継がれて行くが、18世紀頃になると宗派調査の目的は薄れ、戸籍原本のようなものに性格が変わって行く。

音楽現代

2014年10月号 定価840円

- ♪特集 = 大音楽家たちが影響を受けた人と思想・思潮
- ♪特別企画（1）= 追悼 ロリン・マゼール
- ♪特別企画（2）= 第25回PMF（パシフィック・ミュージックフェスティバル）

♪カラー口絵

- ・第25回 パシフィック・ミュージック・フェスティバル
- ・第7回静岡国際オペラコンクール開催記念サマーセッション

♪インタビュー

セルゲイ・ナカリヤコフ、ティツィアーナ・ドゥカーティ、オイロス・アンサンブル、他

〒111-0054 東京都台東区鳥越2-11-11
TOMYビル3F

芸術現代社 Tel.3861-2159

そして200年以上平和が続いた江戸時代に、文学、演劇、音楽、美術、料理など様々な分野で町人文化が花を開く。江戸の末期の識字率は60%を越え、この数字は西洋先進国でも例をみないほどで、町人文化は成熟の時を迎える。

では、黒船のような外圧がなかったなら、江戸時代はもっとずっと長く続いただろうか。この予測については様々な見解があるだろうが、私は長く続いたとは思わない。

これは私の主観だが、江戸の町人文化は、19世紀前半のウィーンにおけるメッテルニヒ体制下に花開いたビーダーマイヤー文化と、どこか似ているように思える。1848年の革命でメッテルニヒは失脚し、新しい時代が訪れ、ビーダーマイヤー文化の時代も終焉する。

また、江戸時代の社会は、江戸の町人たちにとって、それなりに暮らしやすかったかもしれないが、藩によって差はあるものの各地で農村の疲弊は進んでいた。やはり熟れ過ぎた果実が落下するように、江戸時代の末期には時代が変わる兆しが見え始めていたのではなかろうか。

近代への移行を可能にした近世の蓄積

1853年の黒船来航は新時代への突入のきっかけとなるエポックメイキングな事件となり、激動の時代を経て江戸時代は終わり、明治時代に突入する。

尊王攘夷派、開国派など様々な主張が激しくぶつかりあう中で、後々の時代から顧みれば無謀と思えるような思想、行動も生まれたが、紆余曲折を経ながらも我が国が、大きな過ちをせずに近代を迎えることが出来たのは、過去にそれだけの文化的蓄積があったからではなかろうか。我が国は表向き鎖国という原則を掲げながらも、オランダとの交易という窓口を通して当時の西洋の事情にも通じていた識者が幕府内にも諸藩にも存在した。江戸中期には蘭学という学問分野が確立され、幕末の頃には洋学としてさらに発展して行く。国際社会の事情を知り、併せて自国の現実を鋭く洞察する知恵をもつ識者が少なからず存在した。いまは名前を挙げないが、そのような人々がリーダー的役割を果たすことで、我が国は激動の時代を乗り越えることが出来たといえよう。また維新革命において中心的役割を演じたのは下級武士階級に属する志士たちだったが、これらの人々の多くが心に抱いていた「大義のためには自分を犠牲にすることも厭わぬ」という武士道精神も、維新革命を推進する上で、大きな力になったと考えているが、こういう精神は明治以降にまで、良い意味でも、悪い意味でも引き継がれて行く。

我が国の近代化と国際的背景

19世紀後半の世界は、資本主義経済の発展のもと、西洋列強が政治、経済、軍事などあらゆる面で、国力増強を競った時代であった。弱い国は植民地化され強国の食べ物にされかねない時代であったのだ。外国の事情を知る識者たちが黒船来航に危機感を募らせたのも、あの大国の清さえもが理不尽なアヘン戦争に敗れ、西洋列強の餌食になりかかっている現実を目のあたりにしたからであろう。開国はしたものの

の不平等条約の締結を余儀なくされた新政府の政治家達は、不平等条約の屈辱を払い、西洋列強に追いつくために「富国強兵」政策を打ち出す。国のあり方としては江戸時代の藩政治に代わり天皇を中心とした中央集権体制を築いて行く。天皇家は長い歴史を有するものの、日本史において、天皇が政治の中心にあったのは古代の一部の時代に限られている。しかし、諸藩の政治がバラバラに存在する謂わば地方分権国家だった日本を、中央集権国家として一つにまとめあげるためには、精神的に支柱となるものが必要であり、それが天皇だったと云えよう。

日本人は持ち前の努力と消化力により短期間で国力増強に成功し、日清戦争、日露戦争に勝利し、やがて欧米列強と肩を並べる国力を持つようになる。欧米諸国の人々は日本の進出を黄禍（こうか）という差別的用語で表現し忌み嫌い、そして恐れた。

違った観点から眺めた近代化のもう一方の姿

「富国強兵」、「和魂洋才」のスローガンは為政者が掲げたものだが、それだけが我が国の近代化のすべてではない。自由民権思想、社会主義思想、キリスト教精神など為政者側にとって必ずしも都合の良い思想、精神文化も日本人の心に根付いて行く。西洋音楽の導入については、文部省が果たした役割も小さくはないが、人々が自ら望んで取り入れた部分も少なからずあったと思う。一方伝統音楽の分野の人々も西洋音楽を意識し出したと思えるふしがある。例えば、都節（みやこぶし）、田舎節などという楽語は明治以降に作られたものである。それらの造語は体系的な音楽理論をもたなかった伝統音楽側の研究者が、西洋の音楽理論の影響を受けて、伝統音楽の体系化を試みた証のように思える。また宮城道夫が開発した八十弦などから、私は西洋音楽に対する対抗意識を垣間見る気がする。

また、日本人が西洋文化を吸収しようとした時代に、フェノロサなど仏教美術や浮世絵版画など、日本の伝統美術の価値を発見し、日本人に改めて自国の伝統文化の価値を見直すきっかけを与えた外国人も少なからず存在した。東洋人、西洋人を問わず、人は異文化に接することで刺激を受け、自分たちの文化をより豊かにして行くことが出来る。近代化には負の面だけでなく、多くの良い実りをもたらした良い面が沢山あったことも確かである。

ところで「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずといへり」の言葉で有名な福沢諭吉著の「学問のすすめ」はなんと最終的には300万部を売り上げたという。これは、当時は勿論今の時代から見ても驚異的な数字である。前述したように維新革命は下級武士階級主導で成し遂げられたが、それを経済的に支えた商人が少なからず存在した。そういう人々の心のうちには、身分や階層を越えて自分の能力を発揮出来る四民平等の社会の実現という願望と期待が強くあったと思える。それは「学問のすすめ」をむさぼり読んだ庶民や、自由民権運動を進めた人々の願いとも繋がるものがあるし、更に、フランス革命を皮切りに「自由と平等」の社会の実現に向けて立ち上がった西洋近代の市民たちの願いとも重なりあうのではなからうか。

西洋近代の終焉と我が国における近代の継続

国家主義そして民族自決の運動が高まるなか、サラエボ事件をキッカケとして第一次世界大戦(1914~18)が起こる。この戦争は開戦前には誰もが予想できなかったような大量殺戮を伴う凄惨な戦いとなった。戦後、多くの政治家が紛争を武力で解決しようとする事により悲惨な結果を招くことを認識し、国際連盟が設立され、パリ不戦条約が締結される。また長い歴史を誇ったハプスブルク帝国は崩壊し、芸術の分野でも、これまでに見られなかった新しい流れが台頭し、様変わりして行く。欧米諸国はこの戦争を境に、新しい時代に入った。

一方我が国は連合国の一員として参戦したものの、戦争の痛手は殆ど受けず、列強が戦争のため退いた隙に、列強が支配していた市場に進出し漁夫の利を得て、経済は好景気に沸いた。もちろん我が国も第一次世界大戦終了後、国際連盟に参加し、不戦条約の締結にも加わっているが、第一次世界大戦からは殆ど何も学ばなかった。むしろ大国ロシアに奇跡的勝利（実は薄氷の勝利だったが）を収めた格好いい戦争のイメージから抜け出せなかったといえよう。

しかし、我が国の好景気も長くは続かず、1829年に発生した世界大恐慌の煽りを受け、多くの企業が倒産し、街は失業者で溢れる。そういう窮状を背景に、軍部の圧力もあって、1932年に強引に満州国を設立する。そして国際社会からの厳しい批判にさらされ、国際連盟を脱退し、戦争に突入する。表向きは列強により植民地化を余儀なくされていたアジア民族を解放し、共に栄えて行く、大東亜共栄圏を築くとのスローガンを掲げてはいるが、実態は侵略戦争であった。

私は昔、欧州に滞在していた頃、第二次世界大戦についてヨーロッパ人と意見交換したことがあった。彼は戦争の第一要因を、ドイツ人、日本人の民族性に求めた。「ドイツ人、日本人は純民族だからまとまって一方向に突っ走りやすい。純民族は怖いよ」ということだった。ヨーロッパ人は第二次世界大戦を民主主義国家が全体主義国家に勝利した戦いと捉えているようだ。私はそれを否定する訳ではないが、ジョン・W・ホールという歴史学者は、彼の著作で、「もしイギリスやフランスが当時の日本と同じ状況に追い込まれていたら、同じ事をやっただろう。」と書いている。遅れて近代化した日本、ドイツはイギリス、フランスのような植民地を持たず、世界大恐慌がもたらすダメージをより大きく受けたことは確かであろう。

しかし、国家、国民が苦しい状況に追い込まれたからといえ、武力で自国の領土を広げようとするような行為は、国際世論が認めない時代になっていたのだ。

そして戦後を迎える。

第二次世界大戦の終わりを敗戦国として迎えた時点で、日本の近代は終わり、現代に入る。敗戦を通して価値観が大転換する。戦後の時代は私の少年時代と重なるが、この時代に私は「二十四の瞳」、「原爆の子」など心に残る多くの反戦的映画を見せられた。当時の子供達は自由に映画館に行くことは許されず、先生に引率さ

れて大挙して映画館に行ったのだった。当時の先生方の殆どは戦前、戦中の時代に青春を迎えた人達であったが、戦争についてどのように考えていたのだろうか。当時の先生方は学力の面では今の先生方より劣っていたかもしれないが、これからの時代をこの子達に託そうと、熱意と使命感をもって教えていたような気がする。

これ以降の時代については、この文章で述べる範囲を超えているので、ここでは触れない。しかし、戦後という時代が、その前の時代の反省の上に築かれたものだという事は強調しておきたい。

時代の分岐点と人

人は過ちを犯す生き物である。過ちとは戦争だけでなく、地球温暖化、原子力発電所の事故など、すべてが人の犯した過ちである。しかし人は過ちから何かを学びとり、向かう方向を修正することで出来る生き物でもある。第一次大戦を経験し、その過ちに気づき方向転換した国々もあったが、我が国の被害は軽微だったためか、その戦争から教訓をうることが出来ず、太平洋戦争(第二次世界大戦)に突入した。今度は大きな痛手を負い、その反省に立って新しい時代に入った。歴史の各時代区分にはエポックメイキングな事件と重なっていることが多い。それは、その事件が人々の意識、価値観を変動させるキッカケとなるので、時代の分岐点として設定するのに相応しいからである。

ところで、我々の若い頃、世界史の時代区分は、大体、第一次世界大戦までが近代、第一次大戦から第二次大戦までが現代前期、第二次大戦以降が現代後期として区切られていた。しかし、最近では、東欧革命が起こった1989年以降を現代、それ以前を近代とする区切り方が一般的になりつつあるそうである。

なるほど、西洋史ならその方がよさそうな気がする。しかし、日本史の上ではその区切り方はしっくり来ない。1990年以降、バブルの崩壊、55体制崩壊などの事件はあったが、いずれもエポックメイキングというほどの事件ではないように思える。やはり、敗戦が決まった1945年8月15日を時代の分岐点とすべきであろう。

最後に

素人がなぜ歴史のことについて書くのかと言われることがある。「人間は過ちを犯す生き物だが、また過ちに気づき修正することが出来る生き物である」と述べたように、過去を凝視することにより、これから進むべき方向に灯りを点すことが出来るかもしれないからである。歴史は歴史学の専門家のためにだけあるものではない。我々自身を知る手がかりとして、いつも手の届くところに置いておくべきものである。

(なかじま よういち：本誌編集長)

『音楽の世界』8/9月号訂正

32P タイトル 歌の道・我が音楽人生(6)→歌の道・我が音楽人生(7)

多国籍社会と自己について ～在る作曲家の日常から～

作曲 橘川 琢

■はじめに・・・仕事と外国人

国際交流という言葉は、もう特に意識しなくても日常生活に溶け込んでいると感じて久しい。さらに現在、交流から共存へ、多国籍社会へ進んでいるようだ。それを現代特有のキーワード、PC、Net、メールなどが、その距離を劇的に縮めてきた。実際どのように浸透しているか、これらの言葉を元に、東京都在住のある作曲家（筆者）を一例として取り上げ、俯瞰・考察してみたい。自分をサンプルにするのは大変恐縮で、また恥ずかしくもあるが……。

毎朝、PCを立ち上げると、まずFacebook（インターネット上の自己紹介、投稿サイト）をチェックする。連絡が来ていたニューヨーク在住のT氏とのメールを終える。新作を作曲する事を約束する。彼と知己を得たのも不思議な話で、私のFacebookを観たアメリカ人T氏が、いきなりメールで連絡をしてきたのだ。戸惑いつつも話しているうちに、日本人作曲家と共作をする事をライフワークとしている事を知る。そこで作品を書いてPDF（書類形式の一つ）にしてメールで送ったところ、そのご縁で、ニューヨークで、彼の演奏による拙作新曲初演が決まった。

彼が気に入ったのは日本旋法による作品だが、無調も含まれており、話を聞いていると単にエキゾチズムが決め手ではなさそうだった。さらに今度、それをYoutube（インターネット上の動画サイト）で見たカナダ在住の彼の友人演奏家が、モントリオールで演奏したいという。いつの間にか、作品が外国を一人歩きするようになっていた。余談ではあるがアメリカもカナダも、作曲者はまだ行った事が無い。

そうすると、別のメールが届く。

友人の、アメリカ人の作曲家M氏からの返信で、編曲の件OKだという。一緒にする仕事で、編成（ソプラノ、尺八、箏、十七絃箏）と締め切りを伝え、ともに良い編曲をしようと、互いにエールを送る。データはスキャニングして取り込んだ楽譜を送る。仕上がったら、メールでPDF形式で送られて来るだろう。

作曲といえば、先月ピアノソロの曲を脱稿した。今は日本語の詩と音楽、そして華道のコラボレーション作品を作曲している。それが終われば金管五重奏曲。10月、11月、12月はこの拙作発表の演奏会が3つ重なっている。演奏会が終わったら、YoutubeにUPされ世界の人が見られる。これらは実際、どう受け止められるのだろうか。

今、こうした繋がりには、先の例もあるように実際どこでどう繋がり反応されるかわからない。複雑なインターネットの中を情報が乱反射しているかのようだ。

■ネットの中で・・・その日常風景

作曲の合い間、気分転換に Youtube やニコニコ動画（インターネット上の動画サイト）で色々な動画を検索する。日本のコンテンツに外国語の字幕がついていたりして、多国籍感で溢れている。感想も、表記されている国籍がバラバラだ。ざっとみるだけでも日本語を含めて7、8カ国語分書かれている。中にはその作品に対するファンレターのような投稿も在る。

さらに、動画サイトでいつも紙聴している個人発のニコニコ生放送が開始される時間になると、それを PC の別ウィンドウで開き、視聴しながら、書類の整理などする。時折海外からの投稿も在る。そこでは国は問わずコミュニケーションは成立している。

これは余談だが、Net の利便性は生活スタイルを変えた。ニコニコ動画を視聴後、欲しい CD があったので貼られたリンクから Amazon（ネットショップの一つ）へ接続。品質と価格を見比べオーダーをしてクレジットカードの番号を入れると、数日後には手に入る。今ではわざわざ CD ショップに足を運ぶ事も少なくなった。それは海外の製品も例外ではない。個人輸入が簡単に行えるし、そういう専用仲介業者もいる。実際こういう海外ものや同人ものなど普通の CD ショップで買えないものも多い。また CD の形すら取らず、そのまま「音楽データ」として買えるものも在る。それを iTunes（音楽ソフト）に取り込み、iPod Touch（携帯音楽／動画再生機器）に移し替える。聴きながら日常が音楽に乗って進んでゆく。

■外国人と云う名の、いつもの隣人

Net や仕事の間だけではない。対人対面での日常生活にも、外国人との接点はある。土地柄、観光地がそれなりにあるせいか、確かに外国人は多いのだろう。近年では iPhone を片手に旅行する外国人の姿を見るのが珍しくない。時々、声をかけられ、iPhone 上に展開される google map（Net 上の地図ソフト）を二人して見ながら、案内する事も多い。

街角の看板も、複数語表記が増えた。散歩がてら行く有名観光地の売店で、旅行者とおぼしき外国人家族が、店員に質問しつつかき氷を注文していた。バスに乗れば、ベビーカーを押す外国人のお客の乗降を手伝う、別の外国人の姿。深夜、仕事に疲れコンビニや深夜営業のスーパーへ行くと、店員の5分の4が外国人で、皆なかなか日本語が達者。レストランへ行けば、宗教上食べられないものに合わせたメニューが別に準備されている。そういうのがあたり前の風景になりつつある。

■リゾーム型社会

1997年23歳の学生の頃、自分の中でのテーマは、上下左右の複雑な、多方に錯綜する「リゾーム（根茎）型」社会とはなにか、であった。ドゥールズ＝ガタリのそれと比べたら自己解釈も甚だしく、さらに拡大解釈することになるが、その中で自分を取り巻く国際社会とは何か、更に敷衍させて自分のアイデンティティ、とは何か、そして更にそのリゾーム構造の先は？というものが一貫、連鎖したテーマだった。

その1997年に、ヨーロッパを独りで無計画放浪旅をした。勿論iPhoneも無ければ、Netも今程発達していない。独りゆえに誰も頼りに出来ない、誰も味方はいないという状況で、ひりつくような緊張感とともに、大きな荷物を持ち歩きつつ多くの同世代と片言の英語でコミュニケーションをとった。ベルリンの壁の崩壊後の国内を見て回っているというドイツ人二人、ルワンダ内戦を経た青年……そういった同世代の若者と、たまたま一緒に泊まったユースホテルで、持ち合わせていた楽器と白紙の五線譜を前に、セッションし、いろいろ話し合った。みな、自分の居住地域を離れて、不安の旅に飛び込んだ者同士であった。

そこにいた、「個人」という存在は、弱く繊細そのものだった。それは、（私が会った範囲ではあるが）どの国の青年もそうだった。皆、「自分とは何か」をまだ模索している、モラトリアム期の季節のただ中にいる青年達であったからかもしれない。自分のことや自分の国についても色々聞かれた。答えられる事以上に答えられない事が多く、自分自身にあぜんとした。

絶対的な存在があり、上下左右、枝葉のはっきりしている「ツリー（樹木）型」の社会構造から離れ、国際社会という「リゾーム型」社会のなか一個人となった自分の頼りなさ、存在のはかなさは、一人旅がその陰影をより濃くさせる。その不安の中で自己を作ってゆき、自分とは何かを自分に問い続け確立しながら、国際交流を受容していった。その苦労は自分だけではなさそうで、一人旅をしていた者同士、国際交流を受容する前に、まず自分という個を受容するというプロセスを行う必要があるのだと、その上で違いを寛容するのが必要だと、皆の必死のコミュニケーションのなかにも感じ取っていた。

■多国籍空間、そして自己

そこからさらに約15年、現代。

「リゾーム型」社会は現実社会の複雑さによりさらに強固なものとなり、多方に錯綜するインターネットの中ではまさにそのものとして顕現した。PCとNetの生活は、確かに世界を画面の前にし、会話を地球規模にさせた。今、誰もが

cosmopolitan (コスモポリタン) となる機会がある。Net には国際舞台をターゲットとしたプラットフォームが溢れている。「クールジャパン」というキーワードが生まれて、日本人の作るコンテンツというものが注目されやすい土壌も在る。

しかし、そこに主体的に参加することは、他者と比べた場合の「自己とは何か」を、国際的に他者から、いや誰よりも自分に厳しく問われる事を意味するのではないだろうか。多国籍多文化の良さは、ともすれば雑多という名の雑多な一つのカテゴリーに収斂されてしまい、作詞家阿久悠氏のいう「何でもありの、何でもなし」の個人、社会を形成させる。その点において多国籍と無国籍は隣り合わせの関係なのかもしれないのだ。

私自身、先の一人旅の最中、そして旅から帰国後に自分に長く問い続けたのは、まず個というものの原点『自分は何が好きで、何に感動する人間なのか』であった。国を含め生まれ育った環境、土地、趣味嗜好、そういうものを一度棚卸しして、自分の構成要素を知り精査し、それを徹底して自分に問い続け、他者との差異を知り、その上で好きな事、感動する事に忠実であろうとした事であった。その先に、互いの個を尊重し合う多国籍の社会、交流があるのだと信じて。

それは、創作にも影響を及ぼした。旅を終え 1997 年に作曲家を始めて 7 年目、自分とは何か、自己のかたちが見え始めたのと連動するかのようになり、ようやく、第一作目が初めて演奏されたのである。

■おわりに

昨日メールで、知人より今度の演奏会情報が流れて来た。日本人作曲家が作曲し、在日米国人の尺八奏者が演奏する演奏会の舞台案内だ。「アウトサイド・ソサエティ」とある。社会の部外者として日本で暮らした 2 人の外国人の物語だそうだ。面白そうなので、早速返信しておいた。

いまこうして Net を含め、多国籍社会がすぐ隣であたりまえのように進行する生活を送っていると、時折かつて一人で不安に駆られながら旅をしていた同世代の顔と自分を思い出す。そして、あの時の繊細な震えの感覚は今なお忘れられない。

現実社会、そしてインターネットの中における情報と会話の乱反射の中、多国籍社会と自己について模索する旅は、私の内面において今も変わらず続いている。

(きつかわ・みがく 作曲部会 本会理事)

スペイン、ベルリン、ウィーンを旅して（後編）

ピアノ：深沢 亮子

21日(土)晴時々雨 IB7361 便で 13.00 時マドリッド発、ベルリンへ 15.55 時着。スペインとは打って変わって少し冷える。ホテルはクラウン・プラザホテルベルリン・シティセンター・ニュールンベルガーである。夕方ホテルの近くを歩き、第2次世界大戦で破壊されたままのカイザー・ヴィルヘルム記念教会を見る。当時の戦争がいかに悲惨ですさまじいものであったかを、その教会はじっと耐えながら静かに語っているようにみえた。以前に来たときは、重苦しい緊張を強いられるような街の雰囲気があった。しかし今回は広々として明るい感じを受けたのだった。私は50年来この街を3度訪れたが、最後は27、8年も前になるだろうか。助川敏弥さんのご紹介で、ベルリンの作曲家 W. Steffen 氏にお会いしに行った時だった。この方のピアノ・ソナタを私のリサイタルのプログラムに入れ、日本初演として演奏させて頂いたことを大変喜んで下さり、他のドイツの現代の作曲家達の作品も紹介して下さいました。それがご縁で、そのうちのお一人の方が日本の作曲家達の作品を録音したいと言って下さり、ハイデルベルクの放送局まで出かけたことがあった。Steffen 氏も残念ながら亡くなられたが。この方も戦時中たいへんご苦労されたと伺った。

22日(日)時々晴、雨 朝食後、女性のタクシードライバーの車で、郊外のポツダムとサンスーシー宮殿へ向かう。プロイセンのフリードリッヒ大王の大きな存在と古い歴史を思いながら。30年程前に主人と東ドイツを旅した時この地へ行ったのだが、もう一度見てみたいと思った。ポツダムはすでに993年よりあった町で、そのツェツィーリエンホーフは、第二次世界大戦終了後にトルーマン、スターリン、チャーチルの米、ソ、英国三者巨頭会談が行われた所として知られている。（この城はドイツ最後の皇帝、ヴィルヘルム二世のご子息、ヴィルヘルム夫妻の



ポツダム ツェツィーリエンホーフにて

宮殿で、英国風に造られてあった。) ツェツィーリエンホーフを更に奥へ入ると、サンスーシー(仏語で「憂い無く」の意)というロココ調の優雅な宮殿と庭園がある。王家の夏の離宮として使用されていたところだ。

プロイセン王国はハプスブルク帝国よりもずっと後から出来た、云わば新興国だったが(ハプスブルク家は1200年代頃からあるが、こちらは1701年、独のホーエンツォレルン家によって創られた。) フランス、ポーランド、リトアニア、またザルツブルクからも多くの人を集め、軍隊を増やし、産業を活発化し、近代的な秩序を保ちながら国の底力を伸ばしていったという。戦術に長けていたフリードリッヒ大王が1740年、シュレージエンに侵入、「オーストリア継承戦争」が始まり、マリア・テレサ女帝はこの王を「シュレージエン泥棒」と呼び、心良く思っていなかったという。シュレージエンは、今のポーランド南西部にあり、当時はハプスブルク家の支配下に置かれていた。そこは肥沃な土地で、鉄鉱石や石灰なども豊富だったそうだ。

フリードリッヒ大王はフランス好きで、その国から哲学者や音楽家達を招き、自



サンスーシー宮殿にて

らもフルートを吹き、たびたび宮殿でコンサートを催したようだ。(マリア・テレサ女帝もきれいな声を持ち、オペラのアリア等をよく好んでウィーンの宮廷で歌ったと聞かすが、王家の人々がパトロンとして音楽の発展に関与したばかりでなく、自ら作曲をしたり、演奏をしたりして音楽に親しみ それを楽しんだ様子に、心が和

む。) サンスーシーには、フランスの作曲家兼チェリスト、ジャン・ピエール・デュポールも招かれた。モーツァルトは彼の作ったメヌエットをテーマに、9つの変奏曲を書いている。(D-dur K. 573、私の大好きな曲である。) 晩年モーツァルトは生活に困り、この宮殿への就職を考えていたらしい。王への謁見を希望し、サンスーシーまで出かけていったのに、それは叶えられなかったそうだ。

サンスーシーは観光客が多く、室内を見るために2時間半も待たなければならないことが分り、内部見学を止め、外で待機してくれていた女性運転手さんのタクシーで再びベルリン市内へ。ブランデンブルク門の周辺はすっかり開放的になり、若者達でいっぱいだった。門の裏側の東ドイツ駅付近を少し歩いたが、ベルリンの

壁の一部がそのまま残されており、市民たちの落書きで一杯だった。人々が経験した悲劇を忘れないようにと残してあるのだろうか。また近くには、ナチスによって殺害された沢山のユダヤ人のお墓があった。

その運転手さんの言葉のなまりから、旧東ドイツ出身の様だったので、私が「今はどうですか」と聞くと「天国！」と云っていた。東西ドイツの国境が取り壊され、人々が以前と同様、自由に行き来出来るようになってからすでに25年の年月が経つ。当時はだいぶ混乱があったことと思われるが、TVや新聞の報道を見聞きした時、これで本当の平和が訪れる、と興奮したものだ。ベルリンの私達の旅の目的の一つは、まさにその場所を見ることでもあったのだ。



元東ドイツだった所の壁の前で

帰りは、10数年前にボンから引越した日本大使館やソニーセンターの傍を通り、一度ホテルに戻った。夕方出直して、ツォーロギッシャーガルテン駅から電車でペルガモン博物館へ。閉館にはまだ充分時間があるのに、今日の入場券は全部売り切れ、という標示が出ており、仕方なく隣の新博物館へ入った。ここでは古代エジプトとその前の時代の展示が見られる。第二次世界大戦で大層被害を受け、2009年、70年ぶりに開館されたそうだ。H. シュリーマンの発見したトルコの古い地区の遺跡や、ファラオの妃、ネフェルティティの顔の彫刻もあり、なかなか見応えがあった。

23日(月)曇時々雨と晴 早朝にウィーンの人見楷子さんよりホテルへ電話があり、今日、ウィーン到着の折に迎えに来て下さるとのこと、本当に有難かった。彼女は50年前からウィーンに住み、日航に30年間勤められた。亡きご尊父の後を継ぎ、ここ10年間は昭和女子大の理事長としてのお仕事で大変お忙しかった様だが、ようやく一区切りついて、ウィーンに落ち着かれ、こちらの永住権もとられたそうだ。

午前中甥は仕事をし、私は電車で近くの Bauhaus (バウハウス) へ。我国でも有名だと思うが、建築家の W. グロピウスによって1919年にヴァイマールで創設され、工芸、写真、デザイン等、美術と建築に関する総合的な教育を行った学校である。1933年ナチスにより閉校されるまで14年しか存在しなかったが、W. カンディンスキーや P. クレー他、著名な教授陣が人々を教えていた。1919年、工芸学校と美術学校が合併して「国立バウハウス・ヴァイマール」が出来た。1925年にデッサウ、そ

して1932年にベルリンへ移り、私立学校となった。1928年に校長のW.グロピウスは退き、後にH.マイヤー、その後はL.M.van der ローエが校長となる。ベルリンのそれは、アルヒーフとデザインのミュージアムになっており、中に入ると、さまざまな型のシンプルな食器、写真、織物、絵画、建築物の模型等を見ることが出来た。

11.30時前にホテルへ戻り飛行場へ。OS292便、ウィーンには夕方16.50時に到着。楷子さんには2年ぶりにお目にかかったが相変わらずお元気だ。ホテルは以前泊まったことのある1区のHotel Royal。St.シュテファン寺院のすぐ横で、地下鉄の駅の目の前にある便利な所だ。初めてウィーンを訪れた甥のために、ノイヤーマルクト、ケアントナー通り、国立オペラ劇場、楽友協会、私の通った音楽大学、市民公園をぐるりと廻って帰って来たが、毎日沢山歩くので足が少々疲れた。

24日(月)晴 午前中

Hübner 家へリュディアさんをお見舞いに伺う。(ご主人は、すでに亡くなられたが、ヴァイオリニストで、ウィーン・フィルの事務局長でいらした。)彼女の頭はしっかりしておられるが、お顔も小さくなり、足がお悪く、いつもベッドの中か車椅子の生活だと云う。本当にお気の毒だ。何度も足の手術をなさったあと、リハビリをしなかったからと



人見楷子さんと(右)とフンデルトヴァッサーが作った家の前で

楷子さんは云われるが。お嬢さんのプツィと時々来る介護の女性とで彼女の面倒を見ているようだ。1時頃、楷子さんが私たちを迎えに来て下さり、彼女の車でドライブに誘って頂いた。3区にある Hundertwasser (フンデルトヴァッサー。彼は生前、百水とサインをしていたようだ。)の作った面白い建物を見る。以前より度々ウィーンに来ていた私だが、このアパートを傍で眺めたのは初めてだった。居住者がいるので中は見られないが、柱や床等がわざと曲がって作られており、色もカラフルだ。その次は2区にある幾つもの国際機関(ウィーンは国連施設のある4都市—ニューヨーク、ジュネーヴ、ナイロビ、ウィーン—のひとつ。ドナウ川のほとりにある国連都市区内には、IAEA:世界原子力機構やUNIDO:国連工業開発機関などの諸機関がある。)、プラーター(昔は王家の狩の館であったが、その後ウィーン市民の行楽地となった。)の近くを通り、ウィーンの森のカーレンベルクへ。今日

はドナウ川も街もよく見えた。最近(?)新しく出来たレストランで昼食をとり、ウィーン名物のヴィーナー・シュニッツェルやターフェル・シュピッツなどを賞味した。

カーレンベルクは、その昔オスマン・トルコとの戦争の地でもあった。ウィーンには1529年、1683年と2度に亘りオスマン・トルコの兵隊が攻めて来た。1回目は、スレイマン大帝によりウィーンは包囲され、2回目はカラ・ムスタファ率いるトルコ軍が、ハンガリー北部を征服した後、再びこの地でウィーンの軍隊と戦った。ウィーンは兵士の数が少なく困窮していた。シュテファン寺院やシェーンブルン宮殿にも弾丸が撃ち込まれ、市民は恐ろしさでふるえていたという。その時、プリンツ・オイゲン公（フランス、サヴォイ家出身）が大活躍をし、又近隣諸国の協力も得、特に、ポーランドのソビエツキ王が5万の兵隊（7万という説もある。）を率いて援助に来てくれたお蔭で、トルコの軍は敗退。カーレンベルクの教会には、その王様を讃えたレリーフが入口の左側の壁に見られ、後にその場所を訪れたポーランドご出身のローマ法王様のものも右側の壁にとりつけてあった。幸いにもウィーンは戦勝したが、もしも敗けてトルコ軍に支配されていたら今頃どうなっていたらとを考えながら、私達は山を降りた。そして、ベートーヴェンがハイリゲンシュタットの遺書を書いた家を見て、5.30時にホテルへ戻った。

夜は7.30時より国立オペラ劇場へ。今夜の演目はこのオペラハウスでは初めてのL.ヤナーチェク（1854-1928 チェコ、モラヴィア出身）による「利口な女狐」だった。1921年に物語の単行本が出たあと、ヤナーチェクが台本を書き、作品は1923年に完成。1924年11月ブルノ劇場で初演された。1956年にウィーン・フォルクスオーパーでとり上げられ、又日本でも二期会関西支部で1977年11月12日に初演をしている。今回の演出はOtto Schenk、指揮はF. Welser-Möst、舞台装置も照明も幻想的でとても良かった。山林監督のG. Finley、女狐のC. Reiss、狐のH. Ko 他素晴らしく、沢山の動物達も本当によく出来ていたし、オペラ学校の子供たちのぬいぐるみ姿が可愛らしかった。このオペラは、彼の作った他のオペラとは全く異なり、動物が大勢登場し、一見民話風、或いは童話風の外観だが、その中に死と再生を繰り返す生命の不思議や自然への感動、あるいは畏怖の念が表現されている。ヤナーチェク自身の人生観が込められた第3幕の森番のエピローグを、自分の葬儀の際に演奏する様 彼は生前に希望しており、お葬式の時にはその通りに行われたそう。休憩なしで1時間半ほどの短いオペラだったが、そこには、作曲家はもちろんだが、オペラに関わった人達のいろいろな思いが込められていることを感じた。歌手達はすべてチェコ語で歌い、それを覚えるのもたいへんだったことだろう。帰りは、親友のヘルガと彼女の友人達、それに私共5人でオーパン・カフェにて軽食をとった。彼等も同じオペラを観ての帰りだった。

25日(水)晴 午前中はSt.シュテファン寺院に行き、その後マリア・テレサ女帝の夏の離宮シェーンブルン宮殿へ。マリア・テレサ女帝は、彼女の父 皇帝カール

6世亡きあと、皇帝に男子がいなかったため23歳の若さでハプスブルク帝国を継承することとなった。随分気苦労も多かったと思うが、頭脳明晰、天性の政治的手腕をもち、更により側近もいたのだと思うが、幾多の危機を乗り越えられたのだろう。そして家庭にも恵まれ、愛情深く、魅力的な人柄で、多くの人々から親しまれ愛されたという。



シェーンブルン宮殿を背に（左が筆者）

帰りにウィーンの名物ヴァッファルを、St. シュテファンの横にできた Mannerhaus でお土産用に買う。午後は一区のカフェ Oberlaa で3人の親友達、それに私達2人が加わり、暫くしてヘルガの妹さんで、長くアメリカに住んでいるブリギッテが顔を出してくれた。明日の飛行機でアメリカに戻るそうだが、私達は40年ぶり

に会い、再会を喜んだ。5時に皆と別れ、私はすぐ近くのテアター・ムゼウムでR. シュトラウス生誕150年記念の催物を見る。かつて学生の頃、国立オペラ劇場で「バラの騎士」「サロメ」「エレクトラ」「ナクソス島のアリアドネ」「影のない女」等、彼のオペラをよく観聴きしたが、特に「バラの騎士」は何度も観る機会に恵まれた。テアター・ムゼウムでの展示を観ていると、シュヴァルツコップやユリナッツ、ローテンベルガー等の素晴らしい声が流れてきた。それと同時に、彼等の忘れ難いステージが明確に思い出され、懐かしくなり思わず涙が出てしまった。

夜は19.30時からコンツェルトハウスで、ウィーン・シンフォニカー、指揮 Ivor Bolton、合唱はズィング・アカデミー、歌手陣は S. Matteus (Sop)、M. Selinger (Mezzosop)、J. Kaiser (Tenor)、P. Rose (Bass) で、モーツァルトのレクイエムとベートーヴェンのNo.2のシンフォニーを聴く。私の誕生日にとスーゾーが切符を用意してくれてあり、嬉しかった。（やはりプレゼントにと、ヘルガからうす緑色の素敵なウィーン風の絹のスカーフ、レナーテからは小さな額縁に入った昔のザルツブルクの絵を頂いた。）久しぶりに聴いたモーツァルトの「レクイエム」は心の奥底まで届き、ウィーンでこの曲を聴けて本当に幸せだと思った。ベートーヴェンのNo.2は前半に演奏された。私はこの作品をしばらく聴いていなかったが、生き生きとした生命力に満ち、熱く強い意志と、高貴な内面性を感じた。

26日(木)曇、午後晴 朝食後、ドームガッセ1番地にある、モーツァルトがオペラ「フィガロの結婚」を作曲した家へ行く。ウィーンに行くと必ず寄りたいたいと思う場所の一つである。彼の音楽と息吹きをいつもこの家で感じるのだ。そのあとはミハエラプラッツからブルクガルテンに入り、レストラン・パルメンハウスで昼食をとる。そしてアルベアティーナ美術館へ。昨日友人達から勧められ、A. デューラーの展覧会を観て感動した。(A. デューラー:1471~1528、独 ニュールンベルク生まれ。画家、版画家、著述家として活躍したヨーロッパルネサンスを代表する人)薄茶色のうさぎ、祈りの手、等、まるで生きているかのように克明に繊細極まりなく描かれていて、作品のどれもが内面的な静けさを感じさせる。他にも16、17世紀の有名な画家達の絵、印象派やアメリカの現代アートの展示もあったし、ルーベンスの素描も見られた。夜は、1区にあるカフェー・ツェントラルでウィーン最後の食事をした。ここは古くからある有名なカフェーの一つである。

27日(金)晴 レナーテが、早朝にホテルへ、手紙とユニヴェルスイテーツ教会の絵葉書を数枚届けてくれてあった。彼女に会えず残念だったが。11.20時、人見楷子さんがホテルにいらして空港まで車で送って下さった。こうして友人達によくして頂き実に有難く、心から感謝している。

28日(土)曇後雨 朝7.30時到着予定が6.50時に無事成田に着いた。つい先程まで石畳のウィーンの街を歩いていた感触が残っており、何か不思議な気がした。1956年、私が初めて高校2年生でウィーンへ行った時は、円の価値も低く、1\$ = ¥365で、自由に持ち出しも出来ず、海外へは簡単に行けない時代だった。まだ官費の制度が出来ていない頃のこと、渡航費や滞在費を親に出してもらい、両親も何かとたいへんだったと思う。2500ドル分の円を換える許可を得る為に国の試験があり、それにパスしなければ留学は出来なかった。飛行機も南周りしかなく45時間余りも乗っていたが、今では直行便だと12時間で着いてしまうのだから、時代は変わったと痛感する。バルセローナで転んだ時の私の左手指も幾らか重だるい感じがするものの、殆ど元通りになって来た。

(文中のオペラ「利口な女狐」とBauhausについては、一部、私の音楽事務所の方に調べて頂いた。)

(ふかさわ りょうこ 本会代表理事)

スコットランドの独立可否の住民選挙がおこなわれた。結果は独立反対が過半数になって独立は未遂に決まったが、それにしても驚きである。スコットランドといえば、「故郷の空」「美しきわが子はいずこ」、などなど、昔から日本では誰にでも知られる民謡、愛唱歌の地である。さぞかしのどかで牧歌的な所と思っていた。こんな騒動があったのか。

独立は否決されたとはいえ、投票率は80パーセントを超え、賛成、反対はまことに僅差である。反対にきまったとはいえ、これだけ独立派の力が強いということは、今後も大きな火種になるだろう。

私たち日本人にとっては、「イギリス」というのは大英帝国の本国、かつて植民地を含めて、「日没する時なし」、と豪語していた世界帝国の本国である。ところが、国土は広いが本国は意外に小さい。そのことが日本に似ていると、戦時中は日本の国威高揚で語られたこともあった。

しかし、いまさら知ったことでもないが、「The United Kingdom of Great Britain」、つまり、「大ブリテン連合王国」という名の通り、この本国はひとつの国ではない。イングランド、スコットランド、アイルランド、それにもう一つ、ウェールズ、という四つの国が連合して出来ている。前の戦争の初期、日本の空軍がシンガポールに居た最新戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」を撃沈して大戦果となった。ずいぶん長い名前だな、と私の世代は感心したものだが、いま思えば、なるほどそういうわけかと名前の由来がいまさら納得される。

そもそも「国」「くに」とは何だろうか。私たち日本人が考えている観念と世界では違う場合があるらしいことは知っておきたい。日本では藩幕時代、それ以前まで、国という統一体の観念がなかった。明治で近代国家になってから、国威の発揚という次第になり、「お国のために」「国の名誉」「国威の発揚」という観念が出来て国への忠誠という倫理も論理も生まれた。しかし、外国ではすんなりそういう時代に進んだわけではないらしい。かつてオーストリアのハプスブルク王朝はずいぶんと内陸型帝国主義を発揚して周囲を侵略した。そのためポヘミアとかハンガリーとかは攻め込まれてひどい目にあった。芸術家、作曲家もその中にいた。しかし、不可思議なことは作曲家でも亡命、逃走の先がウイーンという人がいる。侵略国の首都に逃げこむとはどういうことなのだろう。この頃はいまのような「国家観念」が無かったのである。どこでもよかった。どうせなら文化文芸が栄えている街に行く。それが侵略者の本拠であることなんかどうでもいい。国のためとか、愛国とか、国の誇りとか、そんなものがなかった。よく言えば「世界人」的な意識か。グローバル化がすでに現実化していたのか。この辺のことは歴史の専門家に詳しくおしえてほしいものである。

(すけがわ・としや 本会代表理事)

この度はこのような機会をいただき、大変光栄であると共に、いつの間にか自分の音楽人生を振り返るような年齢になってしまったことに驚いている。

<母が与えてくれた「環境」>

出身は、茨城県水戸市。今でこそ水戸芸術館や小澤征爾氏率いる水戸室内管弦楽団を擁する文化都市として記憶されるようになったが、当時はまだのんびりとした環境で、周囲に音楽を志す仲間も少なかった。幼児教育を専門とする母の手ほどきでピアノを始めたのは4歳。その前に、あまり記憶はないのだが、母の伴奏で童謡を歌ったり、レコードをかけて1人で踊っていた写真がある。また、ピアノとほぼ同時にソルフェージュの訓練も開始し、毎日母と「音楽教室ごっこ」をしながら、



小学一年時の発表会の写真

絶対音感、ドイツ音名など、小学校入学前に身につけてしまった。師としての母のバイブルは、深沢亮子先生の「ピアノの日記」。その本を片手に、「深沢亮子さんはあなたと同じ歳でこれを弾いていた」「毎日何時間練習していた」と要求してきた。私もすっかり「ピアノの日記」の虜になり、「朝早く起きて1人で火鉢の火をおこして練習をした」と書いてあれば、朝誰よりも起きて石油ストーブに火をつけて練習し（最も1日でくじけて終わってしまったが）、「1回のレッスンにツェルニー5曲を持っていった」と書いてあれば中途半端に5曲持って行って大目玉をくらい、結局1曲も上がらなかったという失態も犯した。ピアノの他にも、当時は珍しかったクラシックバレエを習わせてもらいその時に会得した身体の柔らかさやリズム感、華やかな舞台のイメージなどが、その後のピアノの勉強に大いに役立った。

<何にでも手を出した学生時代>

中学時代は毎週東京までレッスンに通いながらも、吹奏楽部や生徒会の活動にまで手を染める「何でもやりたがり」で、今までの人生で一番忙しかったかもしれない。とにかくいつも眠くて、レッスンに通う電車の中で寝るのが何よりの楽しみだった。高校は東京芸大附属高に進んだが、友人達のすさまじい知識量、持っている楽譜やレコードの多さに圧倒され、また、机を並べている友人達が音楽雑誌に載り、海外のコンクールに出掛けていくという環境は大いに刺激になった。室内楽の授業や発表の場もあり、高3の時にはトリオを組んでアメリカで演奏する機会にも恵まれた。大学生になっても相変わらずの「やりたがり」で、学園祭などのイベントに

は全力で突進し、毎日誰かしらの伴奏を引き受けては譜読みや合わせに忙しい毎日だった。そんな日常を楽しむ反面、高校時代と何ら変わらない環境での肝心のピアノの勉強は頭打ち。「もっと上手くならなければならない」と焦ってみたり、同時に「世の中が必要としているピアニストはほんのひと握り。私がちょっと頑張ったところでなれるはずもない」と投げやりになったり、落ち着かない日々を送っていた。

<温かさと厳しさが混在した留学時代>

その状況を変える出来事が大学3年で起こった。ウィーン在住の友人の誘いで、ザルツブルグの講習会に参加する機会を得、初めてヨーロッパの地を踏んだ。緊張して臨んだ初回のレッスンで、1曲弾き終わったら「sehr gut!」の声が飛び、それまでレッスンで褒められたことなどなかった私は、先生の言葉が誰に向かって発せられたものなのか一瞬判断がつかず、キョロキョロあたりを見回してしまった。そしてニコニコと私をご覧になる先生のお顔を見た時「そうか、自分はまだピアノを勉強していても良いのだな」と胸のつかえがすっと下り、指先にまでエネルギーがみなぎってきた。



留学時代のクラス仲間たちと（一番前が筆者）

加えて天井の高い石造りの建物と湿気のない空気の中に響いた自分の音、力みのない身体の感触は日本に戻っても忘れ難く、あの地で勉強できたら自分は変わるのではないかと、行き詰まっている何かを打破できるのではないかと思いが強くなり、留学を決意した。そして、留学の間は余分なことは考えず勉強に邁進しよう、と心に決めた。

留学時代は、ベルリンの壁崩壊、東欧諸国の分裂、湾岸戦争とまさに激動の時代だったが、永世中立国のオーストリアは治安も良く穏やかな空気が流れており、安心して生活することができた。学校生活では、まず学科の授業に振り回された。大学時代に最小限の授業しか履修していなかったのが仇になり、ドイツ語で楽器学、ピアノ構造学、音楽形式学、音楽史など多くの授業に出席し、口頭試験やレポートをこなさなければならなかった。十分ではない語学力での授業はひたすら苦痛だったが、楽器学の授業は楽器博物館の館長でもある担当教授が実際の展示物を見ながら説明して下さり、ピアノ構造学では郊外にあるベーゼンドルファーの工場まで見学に行くというウィーンならではの授業も経験した。また、必死に丸暗記して口頭試験に臨んだ音楽史は、ドイツ語をほぼ忘れてしまった今でも何故か知識として頭に残っている。ピアノはザルツブルクの講習会からずっとお世話になっていたカルメン・グラーフ・アドネ教授門下に入ったが、週1回の学校でのレッスンの他ご自

宅での補講があり、土曜日には必ずクラス全員が学校のホールに集まり、各々の演奏について意見を出し合う授業もあった。いつも親身になって生徒のことを考え、身を粉にして教えて下さる先生で、他国でのコンクールにも時間に余裕があれば付いて来て下さった。新学期には、「さあ、今学期は何を一緒に勉強する？」と必ず聞かれた。先生は教えるもの、生徒はそれを受け取るもの、と思い込んでいた私には、「一緒に」の響きがとても温かく心強く感じ、教える側となった今ではこの言葉を忘れないようにと日々思っている。本番での演奏が上手く行けば共に喜び、失敗すれば本人より先に泣いてしまう情の深い先生だったが、ひとつだけどうしても理解していただけないことがあった。それは、「日本人はどうして本番緊張してミスをするのか？また万事控え目なのか？」ということだった。先生がブラジルのご出身であったため、クラスにはラテン系の生徒が多く、皆開放的で楽観的な雰囲気は漂っていたせいかもしれない。一度先生に「本番が怖い。」と漏らしたら「そんな人は今すぐ荷物をまとめて日本に帰って家庭に入りなさい！」と怒鳴られ、レッスン室を追い出された。この1月にウィーンを訪ねる機会があり先生にお会いしたが、80歳で録音したというCDを下さり、別れ際の言葉は「まだまだ、ずっと弾き続けなさいね。」だった。

<学生を終えてからの新たな挑戦>



ハワイ、アロハ国際ピアノフェスティバルの写真
向かって右が主宰の中道リサさん、隣が招待アーティストのフレデリック・チュウ氏、一人置いて筆者です。

帰国し大学院に復学したが、その時に大変有難かったのは、地元の恩師や知人が作って下さった「演奏の機会」だった。本番の緊張感の中で弾く経験は、自室でひたすら練習を重ねることの何倍もの効果をもたらす。そして演奏活動を続けながら高校、大学で教鞭を執る機会にも恵まれた。学生時代から続く終わりのない勉強、その勉強を続けるからこそできる後進への指導、そして家庭生活と日々慌ただしく過ごしていた私に、またひとつの転機がやって来た。学生時代、イギリスのコンクールで知り合ったハワイ出身の友人、中道リサさんが、地元の後輩達のためにピアノフェスティバルを開催するという。「海を

越えなければ良い教育が受けられない。そんな子供達に少しでも多くの学習の機会を。」という彼女の熱意に打たれ、微力ながら毎年お手伝いをさせていただいているが、来年10周年を迎える。ハワイのみならず世界各国の子供達、地元の先生方、

近年ではアマチュアの方々も集い、米国本土から中道さんが招聘した一流の教授陣のレッスンやマスタークラス、ワークショップを経験し、コンクールで腕を競い、一流アーティストの演奏会を堪能する。私にとってもこのフェスティバルは、アメリカの最新音楽事情や教授法を知る良い機会となり、才能豊かな子供達の演奏に触れるのも楽しみで、毎年たくさんの刺激を受けている。

<与えてもらったことを次世代へ>

学生時代から受けていた地元への恩、地元の子供達に還元する友人の姿から、自分自身も何か自分が育った地域のために何かできないだろうか？と考え、昨年、高校時代から住んでいる茨城県牛久市に「うしく音楽家協会」を立ち上げた。都心から電車で1時間のベッドタウンであると共にまだ田園風景も残る土地柄、芸術家も多い。以前より、地元の子供達から音大生、



第九演奏会「オーケストラ、合唱、ソリスト、すべて地元から」

アマチュア、プロの音楽家が一堂に会するオーケストラの運営にも携わってきたが、幸い同じ志を持つ仲間にも恵まれ、市政の理解と協力も得、昨年末には、出演者全てを地元出身者、関係者で揃え「オーケストラ、合唱、ソリスト、すべて地元から」と題した第九演奏会を開催した。こうした活動の中から、演奏家のみならず、舞台芸術に携わる若者達も育ち、次世代の音楽社会を背負って行く彼らのために何が出来ることが、今後の私の大きな課題である。

<たくさんの「引き出し」を持つ音楽家に>

ヨーロッパやアメリカで学んだことは、言うまでもなく何のものにも代え難い貴重な経験であるが、「やりたがり」の性格で多くのことに手を出し、ピアノの勉強には若干回り道だったかもしれない物事も、今の生活に大きく役立っている。例えば吹奏楽の経験はオーケストラの楽譜管理に、生徒会は学園祭の経験は組織の運営や会計、事務作業に。一生懸命やってきたことに無駄はないのだな、と思うこの頃である。

(うえなか のりこ 本会 ピアノ会員)

歌の道・我が音楽人生 (8)

～プロ室内合唱団「日唱」と共に半世紀～



室内合唱団日唱代表久住 祐実男

第1部<音楽大学時代>Ⅷ

私が芸大に入学して2年目からの声楽の先生リアフォン・ヘッサート女史から我が音楽人生の殆どを学ぶことが出来た。それは芸術家としての心の豊かさ、礼儀、寛容にまで及んだ。また、絶えざる研究、勉強も勿論だった。私自身はそれらの事を宗教のように守った訳ではない。本人はのんびりしたものだったが、知らず知らずのうちに、思考が影響されていたのだった。ふと気がつくと、こういう時はヘッサート先生ならどう考えるだろうかと一生懸命に考える自分を見つけることが屡だった。先生に師事した40年間は、我が音楽人生の全ての糧となった。

中でも、ディートリヒ・フィッシャーディースカウを聴きなさいと先生に言われ、彼の来日演奏会31回の内30回を聴いた事は前号にも書いた。勿論ディースカウの歌曲のLP, CDは殆ど買い揃えた。こうしてディースカウの演奏を聴いてる内にある事に気付いた。生でも、録音でも、40代、50代、60代、70代と少しずつ、プログラムが変わっていることだった。例えば「水車屋の乙女」の若い時代の演奏は、正に澁刺としていて、美声を駆使した音楽を歌い上げていた。また60代過ぎからは「冬の旅」や「白鳥の歌」のようなややドラマティックなそして渋い歌が、陰影に富んで歌われた。この老境に入った演奏家に対して評論家は、演奏は奥深く豊かな表現だったと、評するのだった。しかし実際に演奏家でないと判らないと思うが、その裏には涙ぐましい努力と、工夫が凝らされているのがよく判り、気持ちが引き締まる思いである。声楽家にとって声の衰えをどうやってカバーするかが最大の問題で、これまでffで歌っていた所をfに落とし代わりに盛り上げ方を少し大げさにするとか、pはppにするとか、レガートを強調するなど、色々工夫が必要だ。この結果、奥深い演奏が生まれるのである。ディースカウは実に見事にこれまでとは違う世界を同じ曲の中に創り出した。ディースカウの演奏は私には真似られないが、言葉の扱い方や、フレーズの作り方等学ぶことが沢山あった。

次に音大時代に私が師事した先生方について書いて見ようと思う。声楽以外で、ピアノの先生は梶原完先生だった。1年間だけで、先生はベルリン音楽大学の教授に招かれて離日された。レッスンの時に時々ベートーヴェンやシューマンを弾いて下さったが、そのヴォリュームに驚かされた。指が太くて鍵盤に挟まってしまいそうだった。私のような下手な生徒を教えることに無関心で、殆どレッスンはなかった。2年目からは宮内先生だった。どういう字を書いたか忘れてしまったが、生徒は「ちんたい子先生」と呼んでいた。先生は教育に熱心な方で、私のピアノを何と

かしようと、丁寧にもた厳しく教えて下さった。さぼりがちな私を叱咤激励してどうやら単位は取れた。それでも旋律のフレーズの歌い方はいつも褒めて下さった。

次は和声法の先生についてだが、1年目は有名な大家下総皖一先生だった。授業の初めに、「和声学」と云う分厚い本を渡され、先ずこれをよく読みなさいと言われた。授業も教科書替わりに、このご自分の書かれた本を基に進められた。ここに書かれている理論は立派なものだろうが、とにかく説明文が難しく、読んでいても意味が頭に入らなかった。成績も良で終わってしまった。しかし下総先生は1年で定年を迎えられ、退職された。2年目からは石桁真礼生先生だった。新進気鋭の作曲家で、歌曲や合唱曲も美しい曲を作られていた。教え方も判り易く私はいっぺんに授業が楽しくなった。成績も優ばかりになった。

次は西洋音楽史の先生について。どういう訳かここでも1年目は辻荘一先生だったが、定年で退職され、翌年から皆川達夫先生が教壇に立った。皆川先生は私と4歳上の若手の音楽学者で、歴史の流れを詳細に判り易く、実例を示しながら教えて下さった。皆川先生とは今日までずっと、お付き合いが続いている。先生のご研究は世界中を回り、貴重で正確な資料を基にされた音楽史を著わした。

語学ではドイツ語の滝澤先生に教わった。滝澤先生はピアノの「ちんだい子先生」のご夫君で、なんとなく親しみが持てた。優しい方だった。しかし私は今後ドイツ歌曲を専門に勉強したいと思っていただけに、ドイツ語の文法は大事だが、発音では滝澤先生では物足らなかった。そしてドイツ人女性のオットーアルマ先生を紹介して頂いた。

私はヘッサート先生で聞きなれた美しいドイツ語をアルマ先生からも教わることが出来た。

フランス語は単位は取らなかったが、ヘッサート先生はフランス語も堪能で、発音だけはみっちり教えて頂けたので、私のレパートリーにはフランス歌曲も沢山できた。それに友人の萩原英彦がフランス歌曲を色々紹介してくれて伴奏まで弾いてくれた。お陰でデュパルク、ショーソン、アーンなど無類な程美しい歌曲を勉強する事ができた。ロシア語には手が届かなかった。次からは指揮の先生について書いてみたい。(つづく)



久住祐実男（くすみ・ゆみお）プロフィール

東京藝術大学卒業。在学中は声楽をリア・フォン・ヘッサートに師事。指揮法を渡辺暁雄と山田一雄に、和声法を下総皖一と石桁真礼生に師事。卒業後は指揮と和声法を小船幸次郎に師事。1963年、仲間20人で、究極のアンサンブルを目指してプロ室内合唱団「日本合唱協会（日唱）」を創立した。1973年には音楽教室「日唱ミュージックアカデミー」を設立し、クラシック音楽の普及に努める。現在日本合唱協会代表及び指揮者。日唱ミュージックアカデミー校長。日本演奏連盟会員。

「明日戦争がはじまる」か？
— ひとまずは穏やかな夜 —

看板にさそわれて入った海鮮の食堂で、サンマの刺身を注文。流通（運輸）革新の幸い、いまどきは山国信州でも獲れたての鮮魚を楽しめる。であれば、旬はサンマ。刺身でしょう。ことはついで、昼だけど1合つけてもらうことに。

旬といえば、1編の詩「明日戦争がはじまる」が、今インターネットを中心に大きな反響を呼んでいるという。新聞の報道で知った。

この詩は7年前の著作だが、今年1月にインターネット上に公開されると、次々と転載され大ブレイク。さらには英語、中国語、フランス語にも翻訳され、世界へ広がりを見せているようだ。

思わぬ広がりには詩人は、「平和のために使って」と著作権を放棄。転載は自由になった。その思いや良し。私もここに転載する。

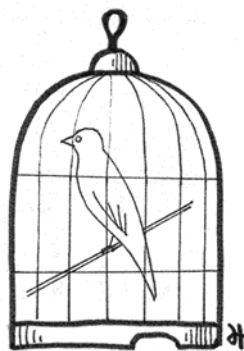
明日戦争がはじまる——宮尾節子

まいにち／満員電車に乗って／人を人とも／思わなくなった／インターネットの／掲示板のカキコミで／心を心とも／思わなくなった／虐待死や／自殺のひんぱつに／命を命と／思わなくなった／じゅんび／は／ばっちりだ／戦争を戦争と／思わなくなるために／いよいよ／明日戦争がはじまる

慣れることで、全てが日常になれば、戦争でないことの方が非日常になるのか……。今日本は、そんな危険をはらんでいるのかもしれない、と思わされる。「よくぞ言葉にしてくれた」と評価

する者あれば、「戦争をあおっているみたいだ」の声もあがる。

詩人の城戸朱理さんは、「潜在する危機を、作者は七年前に独自のアンテナで察知していたわけであり、現代において、詩人が「炭鉱のカナリア」の役割を果たしたといえる稀有（けう）の例となった。」と評価する。



このごろの新聞の読者投書欄には、「危機感を覚えて…」とペンをとる高齢者の反戦の声が増えている。先の大戦経験者のアンテナが察知する、不安の表現なのだ。

かつて軍都を標榜して、ここ松本には、「松本歩兵50連隊」の基地があった。松本の駅は、「勝ってくるぞと勇ましく」で出征する兵士と、「海ゆかば水漬く屍（かばね）」と白木の箱で帰還する英霊の、まさに命の交差点であった。

戦後の平和憲法のもと、軍隊は解散した。がしかし今、陸上自衛隊松本駐屯地が設置され、ここからもイラクの地へ復興の任をになう自衛官が派遣される。

「米陸軍と合同訓練、隊員350人を米国へ派遣」との新聞発表があったのはつい先月。いよいよ、集団的自衛権の具体化が身近に現実味をおびてきたと見るのは、うがち過ぎか。

ザクザクと軍靴の音高く、自衛隊員の市街地行進が市民を不安がらせたのは、数年前のこと。「戦争を戦争と／思わな

くなるために／いよいよ／明日戦争が
はじまる」を、荒唐無稽と笑いとばせな
くなるのかもしれない。



今、私は『ヒ
ロシマからの
出発』を読み
始めた。詩
人・橋爪文さ
んの新著。文
(ぶん)さん

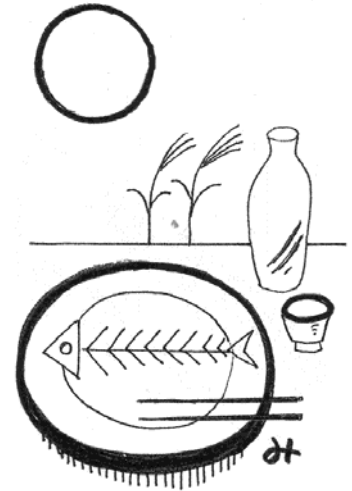
は原爆の被災者。爆心地より1.5キロ、
焦土と化した死の街から奇跡的に生還。
その後遺症に苛(さいな)まれながらも、
反核の活動を続けている。これは、その
文さんの自伝だ。

文さんは、反核、反原発を訴えて国内
外を行脚している。海外は30カ国以上
にも及ぶ。オバマ米国大統領の核軍縮へ
の呼びかけ「プラハ宣言」に共鳴して、
彼に手紙を書いた。「プラハ宣言で、人
間の上に初めて核兵器を使った道義的
責任に触れたことは、歴代の大統領とし
てはあなたが初めてで、評価します。た
だ核の廃絶は兵器だけでなく原発を含
めてほしい。私は将来原発が地球を滅ぼ
すと思っています。」と。福島原発事故
の2年前である。

フクシマ原発事故が現実となった今、
ここにも原発の危機を察知、警告し続け
ていた「炭鉱のカナリア」としての詩人、
橋爪文さんの存在があったことに、深く

思いを寄せたいと思う。14歳での被爆、
その凄絶から生かされた“生命(いの
ち)”。『ヒロシマからの出発』から学
ぶことの、なんと多いことか。

被爆の後遺症に悩み苦しみながら、詩
人として、なによりもあたりまえの主婦
として、力まず明るく、たんととその
“いのち”を燃焼し続ける文さん。私は
そのあり方に敬意を表し、これを「ブン
イズム」と呼
びたいと思う。
ブンイズムの
あふれる、こ
れもまさに旬
の一冊。多く
の手にわたっ
てほしい。



庭からしき
りに虫の声。
秋の夜だ。雲
の切れ間から十六夜の月がのぞく。舞台
はととのった。ここらでペンを置く。気
分転換、一杯やることにしよう。

そうそう、「秋刀魚の歌」佐藤春夫さ
ま！旬の新鮮なサンマは、苦くも塩っぱ
くもなく、ほのかに甘き味にして……。
いやまて、腸(わた)は確認せず、「熱
き涙」の味つけもせなんだ……。

昼に食したサンマを思い出しながら
冷酒の封を切る。肴は間に合わせの甘
辛昆布。なにはともあれ、今夜は穏やか。

【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音
楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達
の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受
賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。



【挿絵】武田 光弘(たけだ みつひろ)



名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

〔第 52 回〕

作品 1「魔王」は、最初の作品ではない

クラシックの曲名を見ると、すぐに気がつくのは題名の尻尾に「作品一」といった数字が付いていることである。いや、付いていないものもあるけれど、まあ、多くの場合は付いているとってよさそう。これは何かといえば、作曲家が書いた作品を整理したもので、一般に「作品番号」と呼ばれている。表示の仕方は「作品一」という場合と、「Op一」との2つ。Opは「作品」を意味するラテン語 Opus の省略記号である。気がつかなかった人は、あらためて CD や演奏会のパンフレットなどを見ていただくとよいだろう。

一般に作品番号は、年代（作曲）順に付けられるのが便利で、そのようになっていると思っている人が多いかもしれない。モーツァルトがそうだし、ベートーヴェンもそのように見える。しかし、これは必ずしも正しくないのである。はっきりいえば、作品番号は作曲されたすべての作品に付いているわけではなく、主として出版された主要な曲に付けられるもの。作曲者によるよりは、出版業者によって付けられることが多いからである。

歴史的にいうと、作品番号が付けられたのはバロック時代からで、最初の例はアドリアーノ・パンキェリ（1567～1634、イタリア）のオルガン曲（1605）だったといわれている。その後コレルリやヴィヴァルディでは個々の曲にではなく、数曲まとめたものに作品番号が付けられ、

J.S.バッハでは一部の Op 番号とは別に、シュミダーによる BWV 番号が有名である。ただしこれは、年代順ではなく曲種順。ケツヘルによるモーツァルトの「K 番号」とは、その点で異なっている。そのほか、ドイッチュによる「シューベルト作品番号」、ホーボーケンによる「ハイドン作品番号」、ロンゴによる「D. スカルラッティ作品番号」、カーク・パトリックによる「D. スカルラッティのソナタ番号」——などというのものもある。

さて、こうした予備知識を頭に入れた上で、大作曲家たちの「作品 1」、すなわち世に出た最初の曲というのを眺めてみよう。必ずしも作曲した最初の曲でないことは、さきにご紹介した通りだが、それにしても殆んど初めの頃の曲である。名曲として知られている曲は少なく、例えばモーツァルトの「アンダンテ、ハ長調」「アレグロ、ハ長調」、ベートーヴェンの「ピアノ三重奏曲第 1 番」、ベルリオーズの「ファウストの 8 つの情景」、ショパンの「ロンド、ハ短調」、ブラームスの「ピアノ・ソナタ第 1 番ハ長調」、ドヴォルザークの「弦楽五重奏曲第 1 番イ短調」——などを挙げても、ピンとこない人が多いに違いない。

しかし、あることはあるのである。よく知られた代表的な名曲が。シューベルトの歌曲「魔王」作品 1 と、シューマンのピアノ曲「アベッグ変奏曲」作品 1 である。「アベッグ変奏曲」の方は誰でも知っているというほどでなく、主として

ピアノを弾く音大生に人気があるが、シューマンがハイデルベルク大学の学生だった頃、舞踏会で知り合ったメタ・アベッグという女性の名を音名 A・B・E・G・G (イ・変ロ・ホ・ト・ト) に置きかえ、これを主題にして書いた変奏曲 (1830年、20才)。ただし彼女には献呈せず、パウリーネ・アベッグという架空の女性に捧げている。

それに対し「魔王」は、古くから教科書などでも取りあげられていて、知らない人はいないだろう。文豪ゲーテの詩をもとにしたこの歌曲は、嵐の中、病気の子供を抱いた父親が馬を走らせている



「魔王」 アルバート・スターナー画

と、子供の魂を奪おうとする魔王が囁きかけてあれこれと誘惑する。おびえて父に助けを求める子供と、聞こえずに無視する父親、そして囁く魔王と、情景を説

明する語り手の4人が登場し、家へ辿りつく子供は死んでいた——というドラマチックな内容を、約4分の長さの中に巧みにまとめている。各々のやりとりと情景描写を惹きたてるピアノ伴奏の見事さは、18才 (1815年) の作とはとても思えない。

こんな作品が作品1とは、どう考えても信じられないが、それこそ初めに説明した出版の事情によるもの。必ずしも最初の作ではなく、同じ1815年に140曲近くも書いたといわれる歌曲の一つとして、6年後の1821年、友人たちによって出版社 (カピー・ウント・ディアベリ社) に売込まれ、その時なぜか作品1として発表されたわけなのである。同社へ辿りつくまでも、このユニークな歌曲はなかなか理解されず、例えば1817年に有名なブライトコップ・ウント・ヘルテル社に売込んだ時には、売れないと判断した同社が、誤ってドレスデンにいた同名の作曲家シューベルトに楽譜を送り返してしまい、その人が「こんな駄作を書いた覚えはない。誰が犯人か確かめてやる！」とひと騒動あったほどである。後の成功を考えると、出版社も別人シューベルトも「なんと見る目のない、勿体ないことを！」となるが、ともあれ、出版に無頓着だったシューベルトの大傑作。ユニークな「作品1」ではある。

.....
【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア (洋楽部)、リーダーズ・ダイジェスト (音楽出版部)、トリオ (現ケンウッド) 系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」 (東京・池袋) の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」 (音楽之友社)、「クイズで愉しむクラシック音楽」 (講談社)、「喜怒哀楽のクラシック」 (集英社) など多数。



【連載】

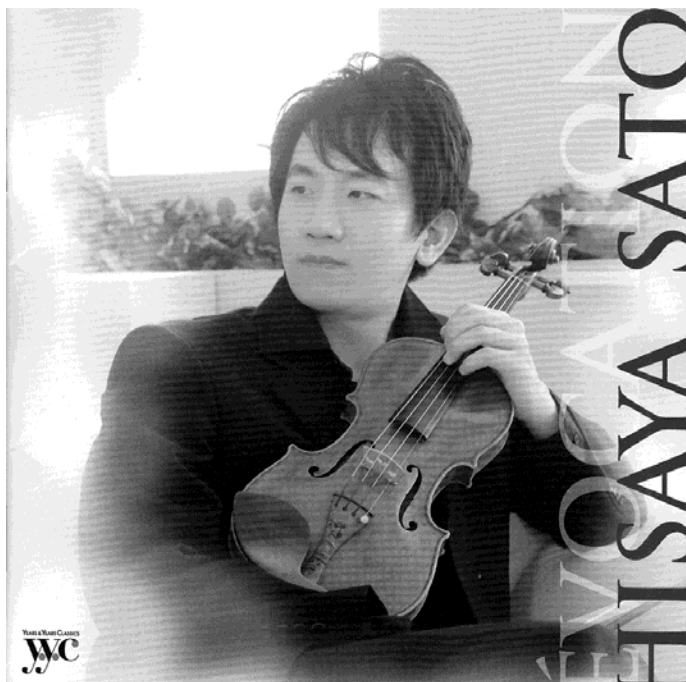
音盤奇譚

板倉 重雄

第 57 回

佐藤久成のエヴォカシオン

「君のテクニックは素晴らしい。でも僕は君の音楽が聴きたいんだ！」
これは、最近ブダペストに留学した知人の指揮者が先生に言われ、困惑した言葉である。日本でクラシック音楽を学んでいるときには問われなかった自分の音楽、音楽上のアイデンティティを本場で問われた知人は、いまその獲得にもがき苦しんでいるという。



そのヒントになるような、見事に音楽上のアイデンティティを獲得した作品、演奏を最近立て続けに聴いた。一つは9月8日に行われた「松尾祐孝・邦楽器作品・個展」である。松尾祐孝（1959～）は日本を代表する作曲家の一人だが、1993年に尺八と管弦楽のための協奏曲の委嘱を受けたことをきっかけに、邦楽器の魅力に気付き、以来邦楽器作品を数多く手がけているという。今回の個展で聴いた「糸の書～二十絃箏と邦楽合奏の為の協奏曲」は、箏や三味線、尺八などが西洋音階でカラフルな音色を交わし合う楽しい作品で、たちまち魅了されてしまった。

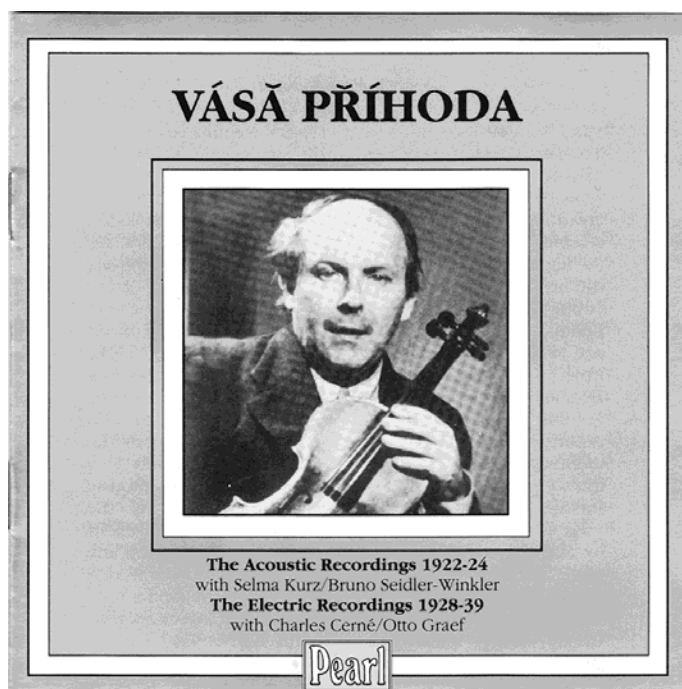
もう一つはヴァイオリンの佐藤久成（1972～）の新作CD「エヴォカシオン」である。CDに入っている14曲は、グレチャニノフの「瞑想曲」やアウリンの「フモレスケ」、ディータの「エヴォカシオン」など、ほとんど知られていない作品ばかり。しかし、どの曲も飛びきりの名曲に聴こえる。古い楽譜から名作を選び出す鑑識眼の高さに加え、自在なテクニック、多彩な音色、想像力豊かな演奏が作品に命を吹き込んでいるからだろう。彼は楽譜収集が趣味で、世界各地を旅した折に手に入れた楽譜は数万点に及ぶという。その中から選り抜きの名曲を復活演奏するのをライフワークにしている。それらの作品のそれぞれ異なる音楽世界を描き分ける技術と音楽性、全てを通して佐藤久成という奏者の個性が強く現れているところが素晴らしい。プシホダやギトリスなど、往年の巨匠の中でも、どこか土の香りのする奏者を想わせる名手である。

●佐藤久成／エヴォカシオン [グレチャニノフ:瞑想曲、フス:エクスタシー、アウリン:フモレスケ、レンバ:愛の詩、ヴォーレ:エレジー、ウィルヘルミ:コンチェルト・シュトゥック “ハンガリー風”、シベリウス:ロマンス、フバイ:アリオーソ、ウィルヘルミ:スウェーデンの調べ、ディーク:エヴォカシオン (喚起)、リヤードフ:悲しみの歌、グリエール:ロマンス、スタトコフスキ:クラコヴィアク、アレンスキー:子守歌]

佐藤久成(ヴァイオリン) 秋場敬浩(ピアノ)

[Years & Years Classics YYC0005 (CD)] **【写真 前ページ】**

2014年4月録音。ご覧の通り他のヴァイオリニストが手掛けない作品ばかり。しかし、べらぼうに楽しい小品集である。



●ヴァーシャ・プシホダ／録音集 [ヴィターリ:シャコンヌ、パガニーニ:協奏曲第1番(ウィルヘルミ編)、グノー:セレナーデ(サラサーテ編)、タルティーニ:悪魔のトリル、シューベルト:連禱(プシホダ編)、ドヴォルザーク:スラヴ舞曲第2番、サラサーテ:ホタ・ナヴァーラ、アンダルシアのロマンス、ツィゴイネルワイゼン、R.シュトラウス:「ばらの騎士」のワルツ(プシホダ編)]

ヴァーシャ・プシホダ(ヴァイオリン)

[英 Pearl GEMMCD9460 (CD)]

1922~39年録音。チェコ出身の名手、

プシホダ(1900~1960)の自由奔放な演奏を味わえる。但しこのCDは入手難なので、2014年10月24日にオクタヴィア・レコードから発売される新しい復刻盤をお勧めしたい(OVCK-00004)。 **【写真 上】**

【板倉重雄氏プロフィール】 1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」(アルファベータ)を上梓。





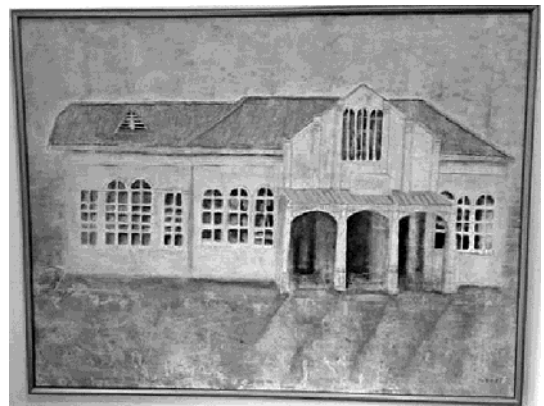
人・アート・思考塾 作曲 小西徹郎

「30年ぶりの再会、そして故郷を見つめる」

今年の夏は実家のある山口県下松市（くだまつ）に帰省した。30年ぶりに中学時代の同級生たちと楽しい時間を過ごした。懐かしい顔は豊かな人生の年輪を重ねていて、子供の頃の話と、また違った視点での話で盛り上がったのがとても新鮮だった。中学時代、活発なスポーツ少女だった難波陽子さんは大学時代に美術に目覚め、イギリスに留学して美術史を学んだときいた。このたびの同窓会でそのことを初めて知った。美術が好きな私は彼女とたくさん話すことができた。そして彼女自身も絵を描く。フェイスブックにアップロードしていた彼女の作品「西岩国駅」（50号）は何とも良い風情があり私は気に入った。

「ここ最近のアートを観る眼」

どうしてもコンセプトだけに走りがちで現代アートを横目にみながら、作品を“作品そのものだけでなく、作品から感じる感情や人格を読み取ってほしい”そういう思いで作品に向き合っている。作品の核は作品にあらず、核は人に、そして鑑賞者の中に存在すると信じている。このことは美術に限らず、音楽やパフォーマンスアートなども同様の捉え方をしている。難波さんの作品「西岩国駅」には穏やかでゆっくりとした時間(50彼女のcA柄 91cm)のようなものを感じるのだ。



同級生、難波陽子さんの作品「西岩国駅」
50彼女のcA柄 91cm

「シャッター街を街歩き」

山口の実家には12日間滞在していた。殆どの時間を生まれ育った街やよく遊びに出かけていた隣の街を歩いてまわることに費やした。この地域の30年前は駅前が栄えており買い物に行くのなら隣の「徳山」という街に出かけたものだった。“みなみ銀座” “銀南街” など華やかな名前の通りには商店が軒を連ね、デパートもあり週末にはそこで遊ぶことが楽しみのひとつであった。

ところが、商業施設が郊外型店舗へと移行していく中で駅前の活気はどんどんなくなっていく。電車やバスよりも車が主な交通手段であるこの地域であったため必然であったといえよう。かつての駅前の商業施設は次々に閉店し、建物だけが残り、そして「シャッター街」となってしまった。大きな駅ビルには数々の店舗が軒

を連ねていたが、今ではその面影はなくなった。人影もまばらなシャッター街を歩いているとどうにかならないものだろうか？という思いが湧き立ってきた。私のいつもの仕事ならば、このシャッター街を使ってアートフェスティバルを企画したりコーディネートしたり、ということなのだろうが、実際に成功する確率は乏しい。今、この街に求められているのはこの街に住み、起業する人が増えていくことなのではないだろうか？そのようにも感じた。ただ、ひとつ思うのは、シャッター街になってしまった街だが、人々はそこまで大きな不自由をすることなく生きている、ということだ。買い物があれば郊外の店舗に買い物にいけるのだ。そう考えるとシャッター街に息を吹き込もう、という動きは一般市民の中では生まれにくいのではないだろうか？とも思える。

「人が大切」

芸術は人が造るもの。だから人がいなければ芸術は生まれない。そして作品を生み出し続け、それを受け止める人、その循環と継続がなければ芸術は盛んにはなっていない。“文化レベル”は地域の産業の定着と発展、住む人の定着と増加があってはじめて上がっていくものなのではないだろうか？だが、たとえ住む人が増えても経済的に潤ったとしても当然そこには芸術、アートに特化した仕掛けが必要ではある。ただ、文化とはあくまで自然発生的である、仕掛けはきっかけでしかない。どうすれば維持継続し、発展させることができるのか？そこにはやはり人の存在、意識がとても重要だ。そして芸術を好きになってくれる鑑賞者を育てていくことがとても大切だ。

普段、東京という大経済圏の中で暮らし、その場所で芸術や芸術を絡めた仕事で生きている私にとってこのシャッター街をみて感じた大きな壁はまさにシャッターのように自身の思考に立ちふさがった。ただ、そんな中、街興しのイベントが行われたり、人が定着し起業するための仕組み作りが進んでいたりもする。仕事で地方をまわっていて感じるのは「観光」というキーワードの先にあるものだ。観光というものが食文化や観光地、といったものだけでなく、そこに芸術があってほしいと心より願う。

こにし・てつろう 本会理事

タイトルロゴ：前川久美子（日本出版美術家連盟 賛助会員）

絵画作品「西岩国駅」難波陽子

中国は電子オルガン界の中興の祖となり得るか —中国高等教育機関に見る新たなうねり—

研究：阿方 俊

高度経済成長と共にすばらしい成長を遂げた日本の電子オルガン需要は、奇しくもピアノと時を同じく1980年にピークを迎え、その後バブル崩壊と共に減少の一途をたどり、今やかつての面影はない。一方、電子オルガンの先進国であった欧米では、日本より10数年前に需要が減りはじめ、今では楽器店の店頭でその姿を見ることができなくなっているのが現状である。そのような中で、中国の高等教育機関（音楽学院、師範大学、職業学院）の最近の動きをみると、本誌8/9月号連載-17、上海音楽学院で開かれた「日中電子オルガン音楽交流週間」でみられるような今の日本では想像できない活発な動きをみることができる。以下、2つの事例を紹介して、中国の電子オルガン界の将来見てみたい。

1つ目は、4月に広州市にある広東外語芸術職業学院という日本の専門学校に当たる学校を訪問した時に目に留まったコンサートのポスターに注目したい。

| | |
|--|--|
| <p>炫出我风采 Electone · 杨俭坤 2014 师生音乐会</p> <p>节目单</p> <p>曲……目……………演奏……者</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、《铁达尼号》主题曲……………李婉桦 2、《我爱我的祖国》……………演唱：方妙妃·伴奏：陈妍羔 3、《星球大战之帝国反击》主题曲……………曾家忻 ……《战场上的圣诞节》…………… 4、《Progress》……………吴恩琳 5、双排键与钢琴合奏《鞑靼人的舞蹈》……………吴恩琳 ……………钢琴：吴城欣 6、《海阔天空》……………陈妍羔 7、《碟中谍》主题曲……………傅可或 8、《天路》……………演唱：方妙妃·伴奏：杨俭坤 9、双排键电子琴合奏《新世界第四乐章》…………… ……………双排键电子琴合奏《拨弦波尔卡》……………指挥：杨俭坤 ……………李婉桦、陈妍羔、傅可或、陈佩欣、刘焱、林甘迪、刘艺 <p>主持人：江嘉琪</p> <p>时间：2014年6月12日晚上19:30 地点：广东外语艺术职业学院（五山校区）9楼学术报告厅 主办：广东外语艺术职业学院音乐系 艺术指导：张晖、金超哲、何德宁、郑琳 专业指导：杨俭坤</p> | <p>輝くエレクトーン 2014年「楊儉坤門下生コンサート」 プログラム</p> <p>と き：2014年6月12日 19：30 と ころ：広東外語芸術職業学院ホール 主 催：広東外語芸術職業学院音楽科</p> <p>曲目および演奏者</p> <ul style="list-style-type: none"> ・映画主題曲他 電子オルガンソロ5曲 ・歌曲 電子オルガン伴奏歌曲2曲 歌：方妙妃 電子オルガン：陳妍羔、楊儉坤 ・ダットン人の踊り 電子オルガン・ピアノデュオ ・新世界第4楽章 電子オルガンアンサンブル（学生7名） 指揮：楊儉坤 |
|--|--|

通常、エレクトーンに対する認識は、この楽器が様々な可能性を持った楽器であるにもかかわらず、ポピュラー音楽を中心としたソロ楽器というものであり、中国でも同じ考えが一般的である。しかし、ポスターを見るとソロの他に歌の伴奏、ピアノとエレクトーンのデュオ、電子オルガン7台のアンサンブルがあってソロ楽器から脱皮した姿を見ることができる。更に注目に値することは、この学校の電子オルガン主任である楊儉坤氏が自ら伴奏や指揮をしていることで、ここにも新しい時代の流れの台頭を見ることができる。

次に挙げられるのは、8月18～23日、昭和音楽大学で中国の電子オルガン関係者約50名を対象とした「第3回サマーミュージックキャンプ in 東京」での教師の動きである。キャンプ内容は、個人レッスン、アンサンブル、即興演奏、日中の話題提供など、このキャンプならではの多彩なものであった。同時に、第3回目のキャンプを迎えるに当たり特に重要視されたことに「指導カルテ」の実施があった。その目的は、このキャンプが一過性のものでなく、点から線へ、線から面へと広がりを持たせていこうという考え方から生まれたものである。具体的な方策として、①音楽学習に関する調査表（病院の問診表）による受講者情報の事前把握、②指導経過および結果の記録として指導カルテ（＝病院の診察カルテ）を作成して日中の情報の共有化を図った。



またこの情報の共有化に加え、帰国後に電子オルガンアンサンブルの実践を確実に展開していくために、キャンプ修了コンサートで王曉蓮北京現代音楽学院教授（写真左）ほか、3名の先生が指揮デビューをした。このことは、中国の電子オルガン教育にとってエポックメイキングな出来事だったといえる。

また、このキャンプの中で目を引いたことに、日中両国から電子

オルガンに関する話題提供があった。

日本からの話題としては、①内海源太“電子オルガндеュエット曲集発刊に際して”②西山淑子“エレクトーン共演によるピアノ小品集 YouTube の紹介”③中嶋恒雄“電子オルガンオリジナル作品「ヴェネツィア幻想」”が紹介された。

中国および台湾からは、①朱波（武漢音楽学院講師）“ピアノから電子鍵盤楽器を含む鍵盤楽器科教員コンサート”②王永剛（ハルビン芸術学院教授）“電子オルガンカリキュラム全面改訂と趙洋洋卒業コンサート”③謝及（星海音楽学院教授）“広州国際電子キーボードフェスティバル”④郭宗愷（台湾・東海大学教授。台湾から講師として招聘されての来日）“台北国立劇場における電子オルガンコンサート”の4つが紹介された。これらは、日本では見聞することのできないダイナミックな内容であり、むしろ日本電子キーボード音楽学会などで発表されるべきものと思われた。中でも謝及教授から11月15～21日に星海音楽学院ここという高等教育機関が主催する初めてのエレクトーンコンクールとシンポジウムが開催されるという発言には驚かされた。それは、今まで電子オルガンコンクールといえばヤマハ、ローランド、中国のリングウェイなど企業主催のものしかなかったからである。以上、いくつかの動きを紹介してきたが、欧米や日本でなし得なかった高等教育機関での活動が中国で着実にうねりになりはじめていることが伺われる。中国は国や地域をこえて、21世紀に電子オルガンの中興の祖になり得ることを確実に実証しつつあるようだ。

（あがた・すぐる 本会 研究会員）

様々な音の風景 XI

【プログラム】

1. 橋川 琢 : Migaku KITSUKAWA
トッカータ第4集 作品46 (2010年作曲/2014年改訂)
Toccata No.4 “Elegant letter” Op.46
演奏 : 栗栖麻衣子 (Pf.)
2. 高橋 通 : Toru TAKAHASHI
「春の日に」 On a Spring Day
演奏 : 鈴木房江 (Sop.) / 高橋澄子 (箏)
尹福美 (ユンボンミ) (Buk=韓国の太鼓) / 高橋通 (木鉦)
3. 北條 直彦 : Naohiko HOUJO
二つのピアノ曲(スケッチブックより) Two Piano Pieces
演奏 : 鈴木菜穂子 (Pf.)
4. 金藤 豊 : Yutaka KANETO
フルート、ヴァイオリン、チェロのための三重奏 Trio for Flute, Violin and Violincello
演奏 : 齊藤寛 (Fl) / 北川靖子 (Vi) / 安田謙一郎 (Vc)
----- (休 憩) -----
5. ロクリアン・正岡 : Locrian MASAOKA
ヴィオラ独奏曲「思念三態」-”オノレ!サイコパス鬼女”
Viola Solo : Two Phases of Thought
演奏 : 柳沢崇史 (Va)
6. 浅香 満 : Mitsuru ASAKA
即興曲 IMPRONMPTU / 3つの官能的な小品 Three Sensual Pieces
演奏 : 稲葉 瑠奈 (Pf)
7. シェーンベルク : Arnold SCHÖENBERG
幻想曲作品47 “Fantasie” Op.47
演奏 : 北川靖子 (Vln.) 北川暁子 (Pf.)
8. 中嶋 恒雄 : Tsuneo NAKAJIMA
「三好達治の詩による2つの歌曲」 Two Songs for Tatuji MIYOSHI
演奏 : 中嶋啓子 (Sop) 松山元 (Pf)

2014年10月23日(木) すみだトリフォニー(小)ホール 18:30開演

《曲目解説・出品者／演奏者プロフィール》

① 橋川 琢：トッカータ第4集 作品46（2010年作曲／2014年改訂） Toccata No.4 “Elegant letter” Op.46

I. Allegretto elegante：私たちの手紙

自由な形のABA様式による。曲全体を通して弱進行が支配的で、そのしなやかな響きや流れで描かれるのは、街を生きる、等身大の我々の姿。現在に顕れる諸相、諸風景を、優しい好奇心に満ちた響きで散策する。演奏時間は約4分。

II. Adagio：《抒情詩人》－エゴン・シーレの絵より

グスタフ・クリムト(1862-1918)と同時代に世紀末ウィーンで活動した画家、エゴン・シーレ(1890-1918)。彼の絵の色彩と構図に現れた死の匂い、そして哀しいまでの生の顕示。

曲は無調の瞑想曲のように始まる。その後G音を中心とした柔らかくたゆたう響きで描かれた静謐な中間部を経て、深みを増した最初の主題が回帰され、最後に再びの静けさの中へと消えてゆく。

曲題に絵の名前を冠しているが、その描写ではなく、絵の印象や心象風景を音の形に成そうとした。演奏時間は約5分。

III. Allegro brillante：光のオブジェクション

ピアノの持つ気品在る輝かしい響きをもとに、転調ごとに見せる色彩の変化を生かしつつ、光を音で彫琢するかのよう作曲された。

ABA形式による。Aはエオリア旋法の主題による光の燦爛（さんらん）と流れ。自由な瞑想的曲想のBによる中間部は、静けさの中にゆらめく濃淡ある光と影の語らい。演奏時間は約4分半。

最後に演奏をご快諾して下さった栗栖麻衣子氏に、深い感謝を捧げる。



【橋川 琢(きつかわ みがく)：作曲】

作曲を助川敏弥、三木稔の各氏ほかに師事。第2回牧野由多可賞作曲コンクールファイナリスト。文部科学省音楽療法専門士。日本音楽療法学会認定音楽療法士(補)。

平成17年(2005年)度(第60回記念)文化庁芸術祭参加。06年・08年度文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。07年全曲ピアノ曲個展開催。08年名古屋フィルハー

モニー交響楽団主催作品個展開催、09年作品個展「花の嵐」開催、10年作品個展「夏の國」開催、11年作品個展「うつろい」開催。13年「Tokyo to New York 2014」に作品が採択され、世界初演となる。「新感覚抒情派(『音楽現代』誌)」と評される抒情豊かな旋律と、日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。



【栗栖 麻衣子（くりす まいこ）：ピアノ】

日本大学芸術学部ピアノコース卒業後ウィーンへ留学。ピアノ演奏および教育法について研鑽を積む。国内外にいて数々のマスタークラスを受講、コンサート出演。第32回家永ピアノオーディション合格。第12回JILA音楽コンクールピアノ部門第1位。現在各地でソリスト、アンサンブルピアニストとして演奏活動を行う傍ら、コンサートプロデュースや後進の指導に携わっている。深沢亮子、ヴィクトル・トイフルマイヤーほか各氏に師事。国際芸術連盟専門家会員、日本音楽舞踊会議理事。

② 高橋 通：「春の日に」 On a Spring Day

「春の日に」は呉世榮の詩（韓国語原詩）をなべくらますみが日本語訳したもので、「時間の丸木舟」に収められている。この詩の持つ雰囲気は、どこか大陸的で、大自然と人との対話のような印象を受けた。そのイメージを大切に作曲した。また、原詩が韓国語であることから、打楽器は韓国の伝統民族楽器を使うことにした。「野の花」と続けて演奏されるように構成されているが、今回は「春の日に」単独での演奏。

2011年津田ホールで開催された第6回「邦楽器とともに」（日本歌曲振興会）で同じメンバーで初演。

春の日に

呉世榮・詩

なべくらますみ・訳

冬が行けば

春が来るということを

誰も教えてはくれなかったけれど

春が来れば

葉が開いてくるということ

誰も教えてはくれなかったけれど

葉が開けば

日陰を作るということを

誰も教えてはくれなかったけれど

私は君に出会ったということで

悲しみを知った

全身ににじむこの草色

青く まぶしい春の日 その

花影に



【高橋 通(たかはし とおる)作曲、木鉦】

神奈川県小田原市に生まれる。日本医科大学大学院終了(医学博士)。一絃琴を琴者故山本游魚師に、ピアノを故川村蔦子師に、作曲を田辺恒弥師に師事。

幽意一絃琴「鳴琴会」主宰。日本音楽舞踊会議会員(作曲、邦楽)。(社)なみの会日本歌曲振興会会員(作曲)。

主な一絃琴曲作品:「春雪夢浮橋」、松尾芭蕉の俳句による「三つの小歌」など。

平成16年茨城県高萩市の市制50周年記念式典で演奏。同年南フランス、平成20年スウェーデン演奏旅行。



【鈴木 房江(すずき ふさえ):ソプラノ】

東京芸術大学声楽科卒業後オーストリアモーツァルトウム音楽院に留学。H・ルートヴィヒ、S・アンダース、R・シュトライヒ、E・ヒンライナー、P・シルハスキー、各氏に師事。ディプローム修了。在学中モーツァルト週間記念演奏会に入選。教会のソリストを務める傍ら、オーストリア放送(ORF)合唱団に入団し、現代音楽に多く触れる。帰国後は日本の現代歌曲を中心に演奏活動。(一社)波の会日本歌曲振興会



【高橋 澄子(たかはし すみこ):箏】

神奈川県小田原市出身。東京芸術大学卒業(生田流箏曲専攻)、同大学院修了。故吉田恭子、故宮城喜代子、故宮城数江、矢崎明子に師事。古典箏曲から現代音楽までの幅広いレパートリーを持ち、白井英治氏(Vn)、大島晶子氏(Vn)をはじめ、ベルリンフィルのリーバーマン氏(Vn)、ウィーンフィルのメンバーによるオットー・ニコライ弦楽四重奏団、ウィーン・ザロデック弦楽四重奏団、ウィーンフィルのコンサートマスターのダニエル・ゲーデ氏など著名な演奏家とも共演し好評を博している。

宮城会大師範、森の会々員、つぼみの会々主、ことサマーコンサートの会、日本音楽に親しむ会、すばるの会等を開催。

【尹福美(ユンボンミ):

【韓国伝統民族舞踊／韓国芸能打楽器〈韓国7面太鼓／杖鼓／太鼓〉／現代舞踊】



[東京ミュージカアカデミー]卒業。伽椰琴・農樂を池成子に師事、韓国舞踊を鄭明子・金順子に師事、打楽器を李晶燮に師事、現代舞踊を[ダンススクエア代官山]森田守恒に師事。(社)韓国国樂協会日本東京支部理事、在日韓国伝統舞踊芸能[J高麗亜]主催代表、[港北ダンスフェスティバル]旧実行委員長。[B dance^unit]主催代表。

高木東六作曲のオペラ「春香伝」、(社)現代舞踊協会中堅公演／池袋芸術劇場、その他数々の国内、韓国公演に出演。(社)韓国国學樂協会公演[歌・舞・樂][日月風流]等の企画製作&出演。神奈川県立外語短大、神奈川県立旭高校などで舞踊を指導。

.....

③ 北條 直彦： 二つのピアノ曲（スケッチブックより） Two Piano Pieces

1 SCENE 2 夏の風

“SCENE” と “夏の風” は 80 年代に、忘れかけていた古いスケッチブックの中にあつた未完の 2 曲を見つけ、それにかなり手を加えて完成させたのだが、色々と気になる所もあり 2012 年に全面的に手直しし、改作とした。これらの曲は現在の私のスタイルとは大きく隔たっている。つまり調性的雰囲気は優勢なのだ。そう云う訳でそのギャップを考えると発表するかどうか迷っていた。だが、只、机の中に眠らせておくのも忍びなく、若き日の思い出として舞台に載せても良いか、と考え今日の初演となった。

“SCENE” は列車の車窓から眺める次々と変化する風景がイメージにあつた。

“夏の風” は夏、長野の高原で過ごした日々を思い出し、気持ち良い一陣の涼風が肌をかすめて行く独特の感覚や、湿気を多く含んだ包み込む様な生暖かい風、驟雨の到来を予期させる、一瞬だが気持ちを何か不安に感じさせる風。そして、それは、風達と共にある、幾つかの場面や様々な風景などがイメージされた若き日の夏の思い出でもあるのだ。尚、この曲の形式は展開部を持っており、ソナタ形式に近く理解し易い構成になっている。



【北條 直彦（ほうじょう なおひこ）：作曲】

東京芸術大学作曲科卒業。池内友次郎、矢代秋雄、三善晃の諸氏に師事。主要作品『響相』室内オーケストラのための～“Interplay”～フルート、チェロ、マリンバのための～“Interplay II”～フルート、ヴァイオリン、ピアノのための一他、作品多数。又、ジャズ様式の研究者、演奏家（ピアノ）でもあり、著書、楽譜出版多数。「アストル・ピアソラタンゴ名曲選」1 巻、2 巻。「新主流派以降の現代ジャズ技法」1～3 巻等の出版がある。日本音楽舞踊会議理事公演局長。日本現代音楽協会会員。キーボードラボ主宰。厚生館福祉会評議員。



【鈴木 菜穂子（すずき なほこ）：ピアノ】

東京都出身。3 歳よりピアノを始める。YAMAHA 音楽教室にてピアノ、エレクトーン、作曲等を学ぶ。在籍中、JOC ドイツ・スイス公演にて自作のピアノコンチェルトを地元のオーケストラと演奏。他、多数のコンサートに出演。子供の為の音楽教室を経て、桐朋女子高等学校音楽科、同大学、同研究科修了。在籍中、Dang Thai Son 氏、Vladimir Tropp 氏 他多数の公開レッスンを受講。またピアノソロ、管弦楽器とのデュオ、室内楽で多数のコンサートに出演。

2004 年親友(vn.)と共にローザンヌ夏期講習に参加。Pierre Amoyal(vn.)、Bruno Canino(pf.)両氏に師事。

これまでに斎木ユリ、徳丸聡子の各氏に師事。

現在は伴奏、介護施設や病院教会等での演奏、現代曲の初演など、フリーで活動中。

一昨年、桑原洋明氏のピアノ奏鳴曲「伊勢之海」を初演』

④ 金藤 豊： フルート、ヴァイオリン、チェロのための三重奏 Trio for Flute, Violin and Violincello

この曲について書く前に私は時代と社会の推移について書かねばならない。

この曲が出来たのは1970～1980年代だったと思う。その内どこかで発表したいと思いつつ機会を失ってしまった。戦後あんなに大流行した？西欧現代音楽もいつの間にか流行らなくなって、— — —

私は20代半ばから～60歳代まで例のアメリカ・モダンジャズと称するものをして来た。と云っても黒人たちのあれとは違って、日本の流行歌もやれば、ジャズソングもやると云う、即ちバンドである。上手も下手もそれなりに、給料がもらえて、ちゃんと生活出来たのである。道っ端でやっているいま頃の若い人たちを思うと、つい悲しい気分になってしまう。と云っても、私はあれを（バンド）一生やるのはいやで、作曲の先生の門をたたいたのだが。

本題に戻ろう。この曲は無調の様だけれど、根元は四度の音である。三部になっているが始めから終わり迄四度は内在する。それと私自身の内面からきこえた音である。モダンジャズの音は（アドリブと称するやつ）は、わりと、無調の音の動きに似ている、—— ———と私は思っている。

終わりにこの曲の出版と発表に尽力して下さった日本音楽舞踊会議の出版部の方々に心より厚く御礼申し上げる次第です。



【金藤 豊（かねとう ゆたか）：作曲】

1931年尾道に生まれる。広島通信講習所卒。ギターを國藤和枝、作曲を伊藤昇、清瀬保二、ヴィクトル・セアール各氏に師事。昭和20年終戦の年、疎開先の高田郡向原の寺の境内より、広島への原爆投下を望見する。ヴァイオリンソナタ第2番（西行ソナタ）、被爆者の葬煙（尺八、ピアノ）、白川の関（宮沢章二詩 女声合唱）等多数の作品がある。



【齋藤 寛（さいとう かん）：フルート】

2004年東京芸術大学卒業。10歳よりフルートを始める。第4回日本クラシック音楽コンクール、特別賞受賞。第51回日本学生音楽コンクール東京大会、奨励賞受賞。

現在はコンサート、録音等、様々な演奏活動を行っている。2013年大友良英率いる「あまちゃんスペシャルビッグバンド」に参加。連続テレビ小説「あまちゃん」のオープニング、劇伴録音、全国ツアー参加、及び紅白歌合戦に出場。2011～2014年オーストリア、ザルツブルグモーツァルテウム音楽院インターナショナルゾンマーアカデミーにてP.L. グラーフのクラスを受講。これまでに、フルートを齋藤幸恵、植村泰一、中川昌三の各氏に師事。



【北川 靖子（きたが わきよこ）：ヴァイオリン】

W. シュタフォンハーゲン教授に師事。東京藝術大学卒業。71年オーストリア国立ウィーン音楽大学入学、ヴァイオリンをF. サモヒール教授に、室内楽をF. ホレチェック教授に師事。75年ウィーン音楽大学を全教授一致の最優秀で卒業。ザルツブルク・ミラベル宮殿、東京でリサイタル。76年ハンブルク交響楽団に入団。コンサートミストレスに就任し81年にハンブルク市文化局主催コンサートでリサイタル。87年東京にてリサイタル。89年北川暁子、千本博愛と「セルヴェ・トリオ」を結成し以後毎年演奏会を開催。北川暁子とは85年12月から91年12月にかけて25回の「ドゥオの夕べ」を開催、92年以降は「ソナタの夕べ」を毎年開催している。現在、瀬戸フィルハーモニー交響楽団（高松）コンサートミストレス。日本音楽舞踊会議理事



【安田 謙一郎（やすだ けんいちろう）：チェロ】

1955年斎藤秀雄に師事。1966年第3回チャイコフスキー国際コンクール第3位入賞。ガスパール・カサドに師事。1968年よりピエール・フルニエに師事。1973年以降、ヨーロッパ各地で、リサイタル、コンチェルト、レコーディングなど多方面で活躍、74年小澤征爾指揮サンフランシスコ響と共演。プラード・カザルス、サン・モリッツ、モントルー、グスタード・メニューインなどのフェスティバルに参加。1986年には安田弦楽四重奏団を結成、クワルテットの活動にも多くの力を注ぎ、80曲におよぶハイドンの弦楽四重奏曲全曲演奏、ベートーヴェン年代順室内楽の演奏会等、意欲的なコンサート活動を続けている。日本音楽舞踊会議会員。

.....

⑤ ロクリアン正岡：ヴィオラ独奏曲「思念三態」ー”オノレ！サイコパス鬼女”
Viola Solo : Two Phases of Thought



他の人類の皆様とともにこの世に身を置かせて頂いている一人間として、まずは佐世保の被害者松尾愛和さんに中心からの哀悼の念を表さずにいられない。だが一方、解剖の為に殺したという加害者の衝動の異様さと度の強さはいったい何なのか？と思念せざるを得なかった。それは丁度、全三楽章を一応書き上げた頃であったが、A子が迫ってきたのは第一楽章を支える私の心へであった。もともと受難曲風の、そう、バッハの平均律第一巻の4番の嬰ハ短調フーガにも通じる曲であったが、

「あのような残虐な行為に対する“護符”足り得るか？」と彼女から問いかけられたような気がし、更に推敲を重ねることとなった。

彼女に身を寄せその強い衝動に襲われる状態を思念しつつそれを聴覚的鏡に映し出すという内面的作業の繰り返しであった。正に、19世紀ドイツの哲学者ショーペンハウアーの思考に重ねれば「意志としての音楽の素から表象としての音楽へ」ということになろうか。結果は、他の楽器ではこうは上手くいかないだろう、ヴィオラの屈折した音に最も相応しいものとなった。だが、A子の心の今後はどうなるのだろうか？残る二つの楽章では、悲劇的な仕業は執拗に巢食うも、若いだけに脳細胞レベルからしての機構の変化により、わずかな遊びやわずかな救いが齎されることとなった。しかし実際の彼女は？

いずれにしても、この事件がなければここまで曲を追い込むことは出来なかつただろう。

悪をも善へと転換する！ここに芸術の極意があるのかもしれない。神でも仏でもない、その神や仏も含め全てのものやことが帰属する「不可知の何様」（*私の造語、力の源泉）という存在の源から、やはり何かの理由があってA子も出て来たのだろうから。

10月30日にはかの日本現代音楽協会でのこの曲の次に来るべき作、弦楽五奏曲(+Cb.)「残忍性の独房、靈性の要塞」の初演あり。*とも、詳しくはホームページを参照されたい。



【柳澤 崇史（やなぎさわ たかし）：ヴィオラ】

5歳よりヴァイオリンを始める。桐朋女子高等学校音楽科（共学）、桐朋学園大学音楽学部、同大学研究科にて学ぶ。大学在学時にヴィオラに転科。第14回日本クラシック音楽コンクール全国大会第3位（最高位）。第20回宝塚ベガ音楽コンクール入選。小澤征爾音楽塾オペラプロジェクト、若い人のための「サイトウ・キネン室内楽勉強会」等に参加。現在までに、ヴァイオリンを渡辺めぐみ、故 鈴木共子、ヴィオラを岡田伸夫、室内楽を岡田伸夫、店村眞積の各氏に師事。

.....
⑥ 浅香 満： 即興曲 IMPRONMPTU
3つの官能的な小品 Three Sensual Pieces

・即興曲

1996年の作品です。タイトル通りの即興的な小品です。

・3つの官能的な小品

宗教性と官能は相反する方向性を示しているように思われがちですが、日本を含む多くの国々の民俗、伝統芸能、神事に色濃く反映されている例が少なくありません。「父」なる《天》と「母」なる《大地》の幸福な交わりは、男女、雌雄の官能的な行為から誕生する聖なる生命を祝福する如く、五穀豊穡、無病息災への祈りと通じ、「官能」は人間の魂を肉体の束縛から解放し、神との合一へと導きます。

1989年に旧通産省の外郭団体からASEAN諸国へ音楽視察のために派遣される機会に恵まれました。この作品は、その先行研究を含む現地での取材の成果として発表した作品群の一部で、上記思想への扉を開き、現在に至る創作活動の基盤へと繋がる源流となりました。

なお、3曲は次のようなタイトルを持っています。

I.ガムラン風に／II.恍惚／III.砂の呪文



【浅香 満（あさか みつる）：作曲】

早稲田大学第一文学部中退。東京藝術大学作曲科卒業。同大学大学院修了。これまでに、＜ヨーロッパ・アジア国際音楽祭＞（ロシア）、＜ヤノヴィエック国際音楽祭＞（ポーランド）はじめ、ルーマニア、ハワイ、イタリア、フィンランド、韓国等で開催された国際音楽祭に度々招かれ、作品は何れも大好評を博している。沖縄本土復帰20周年記念演奏会、ハビビ元インドネシア大統領歓迎演奏会等の委嘱を受けた他、故・本田美奈子を始めとするアーティストのための編曲も数多く手掛ける。

日本作曲家協議会、日本・ロシア音楽家協会、日本音楽舞踊会議各会員。



【稲葉瑠奈（いなば るな）：ピアノ】

東京藝術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻卒業。
作曲を鶴田睦男、ピアノを稲葉依子、御葉袋宣子、服部久美子、Ronald Cavaye、小林仁の各氏に師事。大学在学中の2002年、キングレコードよりデビューCD『ルス・デ・ラ・ルナ～月の光～』をリリース。翌年、CDアルバムと同タイトルのデビューリサイタルを東京文化会館にて実施。以来、国内外でのコンサート、音楽イベント等での演奏活動を行っている。これまでに、和歌山コンクール1位、堺国際音楽コンクール1位、

The 2003 World Piano Competition (米・シンシナティ)アーティスト部門入賞など、多数受賞歴がある。

また、「題名のない音楽会」などの音楽番組、「のだめカンタービレ」（学生時代の桃平美奈子役）などのドラマにも出演。2011年に元アナウンサーの中西モナ（旧姓：山本モナ）、バイオリニストの重岡菜穂子と共に、トリオユニット「3Naccord」としても活動。セカンドアルバム「LOVE SONGS」は、iTunesにて配信中。様々なオムニバスCDもキングレコードより発売中。

.....

**⑦ シェーンベルク Arnold Schönberg
「幻想曲」作品47 “Phantasy” Op.47**

アーノルド・シェーンベルクは1871年ウィーンに生まれる。1951年ロシアンゼルスで死去。20世紀ヨーロッパ芸術音楽の発展に於いて最も重要な作曲家の一人である。

この作品は彼の晩年最後の室内楽作品。1949年に約一月たらずで作曲され、シェーンベルク15歳の誕生記念コンサートで献呈されたコルドフスキーによって初演された。この曲は最初、ヴァイオリンの声部が書かれ後に補足的にピアノパートが書かれた。従って自ずからヴァイオリンパートは難しく、独奏曲では良く現れる、演奏上の難解な技巧が奏者に要求される。また、12音技法がこの曲でも用いられているが、かつて彼の曲にあった古典的な形式感では無く、振幅に幅のあるテーマや、リズムの複雑さ等により情熱的な表現を要求するこの曲は、むしろ初期の後期ロマン派的な、或は12音主義に入る直前の第二期の表現派時代への回帰を思わせる内容とも云えよう。



北川 暁子(きたがわ あきこ：ピアノ)

1950年L.コハンスキー教授に師事。1964年イイノホールで第1回リサイタル。1967年武蔵野音楽大学卒業、ウィーン国立アカデミー入学。R.ハウザー教授に師事。1969年ブザーニ国際コンクール第3位。ウィーン国立アカデミーを全教授一致の最優秀で卒業。ベーゼンドルファーコンクール優勝。1970年ミュンヘン国際コンクール第2位(1位なし)。帰国後、毎年リサイタル開催。1984年演奏活動20周年記念ベートヴェンソナタ全32曲連続演奏会。1989年千本博愛、北川靖子と「セルヴェ・トリオ」を結成。1995年演奏活動30周年ブラームスの夕べ(5夜)開催。2011年から2012年にかけて、3度目のベートーヴェンピアノソナタ全曲演奏会を開催。東京芸術大学名誉教授、日本音楽舞踊会議理事長。

※北川靖子の略歴と写真は P56 参照のこと

⑧ 中嶋 恒雄「三好達治の詩による2つの歌曲」

Two Songs for Tatuji MIYOSHI

1. 一点鐘二点鐘
2. 乳母車

この作品は、1997年に作曲、初演されたが、その後、日本作曲家協議会やウィーン、プラハの演奏会においても再演を重ねた。この作品に見られるような有調と無調、自由リズムと拍節リズムを行き来する私の作品のスタイルについて、チェコモラヴィアのコンセルヴァトワール教授ジャン・グロスマンは、ネオインプレッショニズム(新印象主義)と命名したが、このスタイルでの私のピアノ作品を支離滅裂と批評した日本の批評家に比べ、さすがに見てくれているな、とこの命名に安んじている。



中嶋 恒雄 (なかじま つねお) : 作曲

東京芸術大学音楽学部作曲科、及び楽理科を経て指揮科卒業。1984年カリフォルニア大学サンディエゴ校研究員。上野学園大学、東京学芸大学、北海道教育大学札幌、旭川、釧路校、宮城教育大学、宇都宮大学、静岡大学、信州大学、滋賀大学、岡山大学、金沢大学、愛媛大学、琉球大学大学院の講師を勤めた。現在山梨大学名誉教授、財団法人音楽文化創造参与。著書「音楽教育研究のまとめ方」訳書「ジャズの歴史」他、多くの論文、作品がある。



【中嶋 啓子 (なかじま けいこ) : ソプラノ】

山梨大学音楽科卒業。片野坂栄子氏に師事。ミラノ音楽院に留学しカラ・ヴァンニーニ、マルガレータ・グリエルミ女史のもとで発声法を研究。1996年以降、中嶋恒雄歌曲作品をすべて初演する。2012年、チェコ共和国クロムニェジーシュ Festival Forfest に招かれ、中嶋恒雄の歌曲を演奏し好評を博した。



【松山 元 (まつやま げん) : ピアノ】

ドイツ国立ケルン音楽大学卒業。アイロス・コンタルスキー氏に師事。世界各地で演奏する他、国際ピアノコンクール審査員、国際ピアノ講習会講師を務める。平成12年文化庁派遣芸術家在外研修員、フンボルト大学客員研究員。ベルリン芸術大学講師。第28回中島健蔵音楽賞受賞。現在クラングフォルム・ベルリン室内合奏団代表。山形大学准教授、東京音楽大学客員准教授。

.....
ロクリアン正岡曲、チラシの演奏者欧文名に誤りがあった事をお詫びします。

(公演局)



会と会員の情報

1. CMDJ 会と会員のスケジュール

10月

- 5日(日) 高橋雅光：尺八2重奏曲「伊勢路に寄す」新作初演
【伊勢市観光文化会館 19:00 開演】
- 7日(火) 10月度定例理事会【会事務所 19:00】
- 10日(金) 太田恵美子・八木宏子 第12回チャリティーコンサート
出演：ニヤマ・カンテ(ギニヤ出身・歌手)、ママドウ・ドゥンピア(マリ出身・コラ奏者)
曲目：ベートーヴェン:ヴァイオリンソナタ第7番、シューベルト=リスト:ます 他
共催：「少年ケニヤの友」「おといろいろ」
【調布グリーンホール(小) 19:00 開演 一般：2,500円 学生：2000円】
- 10日(金) 広瀬美紀子(Pf) 第35回ホームコンサート in 八王子
曲目：助川敏弥「小さな四季」より
ピアソラ(北條直彦編曲)ブエノスアイレスの秋、他、
ショパン24の前奏曲集より
【八王子音楽院 11:00 開演 入場料1000円】
- 11日(土) 深沢亮子 公開レッスン 【瑞浪市 ホワイトスクエア 15:00】
- 12日(日) 深沢亮子コンサート【ホワイトスクエア 14:00 お問合せ：0572-68-3143】
- 19日(日) 『音楽の世界』編集会議【会事務所 14:00~】
- 23日(木) 20世紀以降の音楽とその潮流 “様々な音の風景 XI”
【18:30 開演 すみだトリフォニー小ホール 全自由席会員無料、一般3000円、
当日3500円】 詳細は裏面掲載のプログラム参照
- 26日(日) 高橋雅光(公社)日本尺八連盟主催「尺八オーディション」審査委員
【京都市男女共同参画センターホール(ウイング京都)】
- 27日(月) 日本音楽舞踊会議臨時総会【新宿文化センター第5会議室 18:30~】
- 31日(金) 小山佳美(Pf)ほかー復興支援チャリティーコンサート 曲目：一柳慧「限りなき湧水」ほか【19:00 開演 ヤマハ銀座コンサートサロン 全自由2,500円
お問合せ：小山(koyama_piano_1119@yahoo.co.jp) ヤマハ銀座 03-3572-3132】

11月

- 1日(土) ピアノ部会試演会【西荻窪新井会員宅 14:00~16:30】
- 4日(火) 深沢亮子室内楽の夕べ 共演：中村静香(Vn) 毛利伯郎(Vc)
ハイドン：ピアノトリオ
ベートーヴェン：ピアノとヴァイオリンのためのソナタ G-Dur op. 30-3
ドヴォルザーク：ピアノトリオ“ドゥムキー” e-moll op. 90
【南麻布セントレホール 19:00 問合せ：日唄文化協会 TEL 03-3271-3966】
- 5日(水) 山木七重(箏)平成26年度(第69回)文化庁芸術祭参加公演
第十回山田流箏曲山木七重リサイタル
○演目「橋姫」「忍ぶ草」「長恨歌」
○賛助出演 山登松和 小林千佳子 藤舎推峰
【紀尾井小ホール 3000円 全席自由
チケット取扱：紀尾井ホールチケットセンター03-3237-0061
(10~18時日・祝休) <http://www.hougaku.co.jp/7e/>】
- 7日(金) 11月度定例理事会【会事務所 19:00】
- 9日(日) 第39回 ”歌の夕べ” 高橋雅光 作曲「ねんねのねむの木」他。
須藤さやか(SOP) 荻久保良子(ピアノ)【護国寺同人教会 15:00 開演 ¥2,000】

- 15日(土)第28回ピアノ部会公演【原宿アコスタディオ 13:00 一般3,000円】
 出演：原口摩純・小崎幸子・小崎麻美・山下早苗・武居美和子・山上由布子・新井知子
- 16日(日) 広瀬美紀子(Pf) ピティナトークコンサート
 ピアソラ(北條直彦編曲) ブエノスアイレスの秋、天使の死 他
 【京都修学院ステップ(京都) 入場無料】
- 18日(火)『音楽の世界』編集会議【会事務所 19:00~】
- 21日(金)「Eレオケによるコンチェルトとアリアの夕べ」
 【渋谷 ヤマハ エレクトーンシティ 19:00 全自由席 2,500円】
 詳細は裏面掲載のプログラム参照
- 23日(日) 小崎麻美(Pf) ほか 東大和市音楽連盟主催 ジョイントコンサート
 出演者：小崎麻美(ピアノ)、安永武司(クラリネット)、安保美希(ピアノ) 【東大和市民会館ハミングホール小ホール 14:00開演 13:30開場
 問い合わせ：042-564-3673(小崎)】
- 25日(火) 深沢亮子 共演：伊藤 維
 ベートーヴェン ピアノとヴァイオリンのためのソナタ No.8
 シューマン ピアノとヴァイオリンのためのソナタ No.1
 【新宿住友ビル7F 朝日カルチャーセンター 13:00
 問合せ 朝日カルチャーセンター 03-3344-1945】
- 25日(火) 原口摩純 レクチャーコンサート
 【東洋英和女学院大学横浜校地 10:40~ (年齢男女問わず受講可)2500円
 問合せ&申込み:045-922-9707 主催:東洋英和女学院大学生涯学習センター】
- 29日(土) 詩と音楽を歌い奏でるトロッタの会 Vol.20
 橘川琢作曲「花舞」op.59(初演)
 高橋通作曲「命のある風景」(初演)
 【早稲田奉仕園リパティホール 18時開演 3,500円】

12月

- 5日(金) 室内楽の夕べ ~深沢亮子と室内楽の仲間達
 深沢亮子(pf) 恵藤久美子(vn) 中村静香(va) 安田謙一郎(vc)
 助川敏弥 ピアノ三重奏曲(2011年:初演)(pf、vn、vc)
 シューベルト アルペジオーネソナタ(va、pf)
 モーツァルト ピアノ4重奏曲第一番(pf、vn、va、vc)
 【音楽の友ホール 19:00開演 4,500円 会員割引あり】
- 8日(月)12月度定例理事会 【会事務所 19:00】
- 9日(火) 現代作曲家グループ「蒼」による新作書き下ろし演奏会 32th
 「金管五重奏による5つの視点」
 清道洋一作曲：セレナーデ ~ serenade ~
 橘川琢：組曲《都市の肖像》第7集 「Metropolitan silhouettes」Op.60
 【すみだトリフォニーホール小ホール 19:00- 全席自由3,500円】
- 14日(日) 高橋雅光：尺八3重奏曲「絆」新作委嘱初演。
 (公社)日本尺八連盟広島支部主催「全国演奏大会 in 広島」
 【広島上野学園大ホール 13:00開演 3,000円】
- 19日(金)『音楽の世界』編集会議【会事務所 19:00~】
- 20日(土)北川暁子ピアノリサイタル~オールショパンプログラム~第3夜
 幻想ポロネーズ Op.61 スケルツォ第4番 Op.54 2つのノクターン Op.62 他
 【東京オペラシテリサイタルホール 19:00 一般5,000円 学生3,000円
 3夜連続券12,000円(サウンドギャラリーのみ取扱い)】
- 21日(日) 高橋雅光：尺八と箏・一七絃による大合奏曲「彩の国の旅路」

埼玉邦楽合奏団第1回定期演奏会 【上尾文化センター 13:00(開演)】

2015年

1月

- 7日(水) 新年会【会場未定・18:00~20:00】
2015年度第1回理事会【16:00~17:30】
16日(金) 声楽部会公演 「2015年新春に歌う~夢と希望と、そして・・・」
【すみだトリフォニー小ホール(詳細未定)】

2月

- 4日(水) 動き、舞踊、所作と音楽 第3回公演【すみだトリフォニー小ホール】
7日(土) 2月度定例理事会 【会事務所 19:00】
8日(日) 原口摩純 ピティナトークコンサート
ピアノソロ, 連弾, ブラームスピアノトリオ
【フィリアホール/横浜青葉台 入場無料問合せ申込:ピティナ 03-3944-1583】
11日(水・祝) 日本音楽舞踊会議 2015年度(第53期) 定期総会

3月

- 5日(木) 邦楽部会第2回演奏会【すみだトリフォニー小ホール】 詳細未定
7日(土) 3月度定例理事会 【会事務所 19:00】
8日(日) 原口摩純 ソロリサイタル ヤマハ銀座サロンコンサート
【お問合せ&お申込み:ヤマハ銀座店 03-3572-3132】

4月

- 7日(火) 4月度定例理事会【会事務所 19:00】
10日(金) フレッシュコンサート 2015【すみだトリフォニー小ホール 詳細企画】

5月

- 7日(木) 5月度定例理事会 【会事務所 19:00】
14日(木) 作曲部会公演【すみだトリフォニー小ホール 詳細企画】
16日(土) 深沢亮子コンサート 演奏とお話(曲目未定)
【14:30開演 お問合せ 東金文化会館小ホール 0475-55-6211】

6月

- 8日(月) 6月度定例理事会 【会事務所 19:00】
14日(日) 日本音楽舞踊会議 CMDJ 50周年記念公演
【上野文化会館小ホール 詳細企画】

7月

- 3日(金) 声楽部会公演「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」
【すみだトリフォニー小ホール 午後公演(詳細未定)】
7日(火) 7月度定例理事会 【会事務所 19:00】

9月

29日(火) CMDJ2015年 オペラコンサート

会員スケジュールの表示(凡例)について

ゴシック体文字は日本音楽舞踊会議主催(含む、各部会主催)公演予定です。本会主催公演は、会員は無料、または割引価格にて入場できます。

明朝体文字は会員から寄せられた情報、会関係者が企画、参加して居る事業や公演の情報です。

明朝体太文字は、本会の運営に関わる会議等の予定です。

※「会員から寄せられた情報」等は原文に準じますが、文字数の制限上、項目内容等を変更する場合があります事をお断りします。

2. 新入会 ごあいさつ

馬場 俊 (ばば たかし 邦楽部会 尺八 正会員)



このたび、助川敏弥先生、佐薙のり子先生のご紹介によりまして、入会することになりましたので、自己紹介も兼ねまして一言ごあいさつ申し上げます。

私は、初世 佐薙岡豊先生が創立して活動を開始し、ご逝去後佐薙のり子先生が代表を継承していらっしゃいます「札幌・新音楽集団“群”」におきまして、尺人を担当しております。

私は、いわゆる「ノベンバーステップス世代」といわれる世代でありまして、ノベンバーステップスの尺八に魅せられて、尺八を習いはじめた人間であります。尺八は、故関段悟道師・長岡篁道師の下で「三曲・古典本曲」、琴古流宗家竹友社 三世 川瀬順輔師の下で「琴古流本曲J」、百銭会主宰善養寺恵介師の下で「古典本曲」を師事してまいりました。

この間、前述いたしました「札幌・新音楽集団“群”」におきまして、「現代邦楽」に触れる機会を、初世佐薙岡豊先生・佐薙のり子先生から賜りまして、現在に至っております。

本年下期から本会に入会を機に、会員皆様の活動を拝見、拝聴しながら、広く勉強をしたいと考えておりますので、宜しくお願い申し上げます。

大畑豊梢 (芸名 おおはた とよすえ 邦楽部会 箏 家族会員 本名 馬場こずえ)



このたび、助川敏弥先生・佐薙のり子先生にご紹介いただきまして、入会することになりました。山田流箏曲を専門にしております。

本会への入会によりまして、諸先輩会員皆様から刺激をいただいて、いっそう研鑽につとめて参りたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

時には予期しなかった事故や事件が突然襲いびっくりさせられることがあります。木曾の御嶽山の噴火には驚きました。紅葉の一番美しい時期の土曜日だったため、登山者が多く、そのため犠牲になられた方の数も多かったのでしょう。被害に遭われた方々にはお気の毒ですが、決して自然を侮ってはならないという教訓を改めて噛みしめました。ところで先月 25 日の日本音楽舞踊会議オペラ公演においても、ホールの備品の CD プレーヤーが突然読み込みエラーを起こして停止するという予期せぬ事故が起こりその後の進行がスムーズに行かなくなりました。若い歌手達が熱心に取り組んでいただけない、そんなことでコンサートに水を差す結果になったことが残念でありませんが、自然が気まぐれであるように、人間が製作した機器も不完全で、時には事故を起こすということでしょう。起こったことは元に戻せない、落ち込まないで前向きな心を持って、みんなで協力して今度こそよりよいものを作ろうと、明日に向けて気持ちを新たに挑みたいと思います。(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

| | | |
|-----|-----------------------|--------------|
| 北海道 | ヤマハ・ミュージック札幌店 | 011-512-1726 |
| 福島 | 福島大学生協 | 024-548-0091 |
| 千葉 | 紀伊国屋書店千葉営業所 | 043-296-0188 |
| 東京 | オリオン書房外商部 | 042-529-2311 |
| | (株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター | 03-3354-0131 |
| | アカデミア・ミュージック(株) | 03-3813-6751 |
| | 全国学生生協連合会図書サービス | 03-3382-3891 |
| | 早稲田大学生協ブックセンター | 03-3202-3236 |
| | (株)ジュンク堂書店 東京外商部 | 03-6457-7049 |
| 神奈川 | 昭和音楽大学購買店 | 046-245-8100 |
| 静岡 | 吉見書店 | 054-252-0157 |
| 愛知 | 正文館書店外商部 | 052-931-9321 |
| | (株)東海図書館サービス | 052-501-0263 |
| 大阪 | (株)ヤマミュージック大阪心斎橋店 | 06-211-8331 |
| | ユーゴー書店 | 06-623-2341 |
| | (株)ジュンク堂書店 外商本部 大阪支社 | 06-4693-8210 |
| 兵庫 | (株)ジュンク堂書店 外商部 | 078-262-7794 |
| 京都 | 龍谷大学生協書籍部 | 075-642-0103 |
| 沖縄 | 沖縄教販(株) | 098-868-4170 |

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢 高橋 通 湯浅玲子

編集部員：新井知子 浦 富美 栗栖麻衣子 小西徹郎 高島和義 高橋雅光

戸引小夜子 北條直彦

音楽の世界 10月号(通巻 562号)

2014年10月1日発行 定価 500円(本体 462円)

発行人：英二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-1-6 寿美ビル 305 Tel/Fax: (03) 3369 7496

HP: <http://cmdj1962.com/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> (アーカイブ)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03) 3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04) 7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします